
神風伝記

恢坐志津那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神風伝記

【Nコード】

N5547F

【作者名】

恢坐志津那

【あらすじ】

戦争の無い国…日本。人々は平和を謳歌し、幸せに暮らしていた。だが、それはあくまで“表の世界”の話。ほんの少し位相のズレた…“裏の世界”。そこでは、荒れ果てた大地で“契約者”と呼ばれる魔物と“神風”という組織が日夜戦いを繰り返していた…。鏡に吸い込まれ、裏の世界に来てしまった普通の女子高生、美奈子。その世界で美奈子が見つける絆とは…！？異世界ファンタジーの傑作！

鏡の誘惑

女性が一人立っていた。

荒れ果てたような乾いた黄色い地面の上…女性は呆然と立ち尽くしていたのだ。

2

「ここ…どこかしら…？誰かいないの？」

『……………せよ…。』

何か声が聞こえる。

地から湧き出るような低い声だ。

「誰？どこにいるの？」

『我は契約者…。汝…我と…契約せよ！』

「契約…？一体、何のこ………きゃあああ！？」

女性は大きく悲鳴を上げると、そのまま気絶したかのように倒れてしまった。

彼女の背中には、悪魔でも天使でもない、青い小さな翼を持つ人型の物体が覆い被さっている。

やがてそれは女性の体を侵略していった……………。

「ふんふふーん…とうるる…るるーん。……うん、こんな感じがな。」

茶色く短い髪を整え、少女は満足げな笑みを見せた。

「美奈子ー！準備はできたのー？あと五分で始まるわよー！」

下から母親の呼ぶ声が聞こえる。

「もう終わるよー。…あとは、前髪をピンで止めて完成つと。」

美奈子というらしい少女は、先ほどからずっと上機嫌で鼻歌を歌い続けていた。

それもそのはずで、今日は彼女の１６歳の誕生日なのである。

「よっしー！」

美奈子は小さくガッツポーズをとると、タタツと階段を駆け下りていった。

一階ではケーキを取り分ける皿を母親が並べていた。

唐揚げの香ばしい香りが美奈子の鼻をひくつかせる。

「美味しそう…。」

「つまみ食いはダメよ。あなたは今日の主役なんだから、行儀良くしてなきゃ。」

「つまみ食いなんかしないよ。そんなことしたら、自分で自分の誕生日会を台無しにするようなもんじゃん。」

「ふふ…冗談よ、冗談。……あ、そうそう。誕生日会始まる前に…渡しておきたいものがあるの。」

母親は思い出しように言うと、奥の部屋から一つの鏡を引っ張り出してきた。

縁は木でできていることや、鏡面に埃が付いていることなどからかなりの年代物とわかる。

「渡しておきたいものって…この鏡？」

「そうよ。美奈子、言ってたでしょ？姿が全部写る大きな鏡が欲しいって。だから、物置を探してみたら、この鏡が出てきたのよ。」

「…こんな鏡あったけ？おばあちゃんのかな？……ま、いつか古いけど使えなくもないから、貰っておこうかな。」

母親に礼を言ってから、美奈子は鏡を自分の部屋に運んだ。

「んー…よっ…とと！ふー…重かった…。」

鏡は見た目よりも相当な重さであった。

勉強机の横まで運び終えた時には、美奈子の息は上がってしまっていた。

「ふう…なんでこんな日に疲れなきゃならないのかな、もう…。でも、まあ…最後の服装チェックできるから、無駄じゃないんだけど。」

気を取り直して、運んで来たばかりの鏡の前に彼女は立つ。

「髪…よし。化粧……よし。服装……完璧！」

歓喜の声を上げた美奈子だが、去ろうとした時に不意に振り返った。

…鏡の丁度真中辺りが、埃か何か白く汚れていたからである。

（けっこう払ったのに、まだ埃付いているみたい…。あー、やっぱり…気になる！）

再び鏡の前に戻り、鏡の表面をティッシュで軽く拭こうと鏡に触れた瞬間。

「えっ…今、中から風が吹いてき…わあああ!？」

中から台風のような風が吹いてきて、それはあっという間に美奈子の体を鏡の中へと吸い込んだのである。

……。

風が収まった時には美奈子の姿は無く、彼女の髪に付いていたバレッタだけが床に残っていた…。

そこは、辺り一面黄色い土に覆われた荒地だった。

美奈子は、痛たたたと腰をさすりながら、ゆっくりと起き上がった。

「鏡に吸い込まれるとか、本当有り得ない…。なんで!どうして! てか…ここ…、どこよ…。」

嘆いてみるが、どこからも言葉は返ってこない。

ただ、ヒュオオオ…と風の吹き荒ぶ音が聞こえてくるだけである。

(砂漠…?そもそも、ここって日本…?鏡の中…?)

美奈子の頭の中で無数のハテナマークが飛び交う。

辺りを見回しても、人の姿や動物の姿は全く見当たらない。

（不毛の地…とかいうやつ？わかんない…。わかんないから…）

「とりあえず、鏡を探してみよつと…。鏡から入ったんだから、鏡から出れるはず！…って、その鏡が見当たらないんだった。」

ダメじゃんかと自分てツツコミを入れつつ、美奈子はテクテクと歩き出す。

どちらから来たのか、どちらへ向かえばいいのかわからないが、とにかく北だと思つ方向へ。

（今頃、誕生会始まって、美味しいご馳走食べてたはずなのになあ…。）

そんなことを思いながら、彼女は歩いて行くのだった…。

（あつ！こつちに来て正解だったかも。）

そろそろ歩き疲れたなと思い始めた頃に、美奈子はようやく人を見した。

それも一人ではない。

四人も居るのだ。

よく見えないが、一人は女性で後の三人は男性のようだ。

「すみませーん！道がわからなくて…良かったら教えて下さーい！」

相変わらず地面は荒れ果てていたが、美奈子の心は弾んでいた。

満面笑顔で手を振りながら、四人に駆け寄る。

そして、道を教えてもらって家に帰る。

…はずだったのだが。

「避ける！」

「へっ？えっ…きゃっ！？」

次の瞬間。

美奈子は四人の内の一髪髪の長い男性に、体を掴まれ地面に押しつけられていた。

ドサッという音が響く。

「痛ったー…何よ一体…？」

「避けると言ったのに、避けなかったから仕方無い。」

「そんなこと言われても…何が何だかわかんない…あつ。」

青年と美奈子の視線がピタリと合った。

漆黒の髪を首の後ろでまとめた青年は、茶色い澄んだ瞳を持っていた。

歳も美奈子と同じか、少し上といったところだろうか。

切れ長の睫…じっと見つめる眼差し…端正な顔立ちなど…どれをとっても、実に魅力的であった。

美奈子の頬がポツと赤くなる。

「あ、あの…道を聞きたいだけで…そういう気は全然…」

「吹雪！後ろだ！」

緑色の短髪の男性の声に応じるように、吹雪と呼ばれた青年はサッと振り返る。

その手には、いつの間にか青い長剣が携えられていた。

「くっ…青龍断！」

青年の長剣が後ろに居た“何か”を断ち切る。

グオオオと凄まじい断末魔の叫びが響く。

美奈子の目にもほんの一瞬だけ、叫びの主が見えた。

それは頭に角が生え瞳が灰色で爪が鋭く長く伸びた、人間のようで人間で無い者だった。

「吹雪…大丈夫か!？」

「そっちのお嬢さんもケガは無い？」

戦いが終わったことを確認し、四人の内の残りの二人が駆け寄ってきた。

吹雪の名前を呼んだ男性と、もう一人はウルフカットの黒髪を持つ青年である。

「大丈夫だ、天砂。」

「あ、はい…ケガは無いです。…何度も打って腰は痛いけど。」

吹雪は端的に、美奈子は腰をさすりながら答えた。

「ところで、お嬢さん。君はなんで…」

「なぜここに来たんだ？」

黒髪の青年…天砂の言葉を遮り、鋭い眼差しで吹雪が訊いた。

「えっ…なぜって言われても…。」

「…一ヶ月も前に、避難勧告が発令したはずだ。付近の住民は、ここから離れるようにと。」

「避難勧告…？なんで？」

「最近、“契約者”の数が異様なほどに増えてきたからだよ。」

天砂が答える。

「契約者…？何のこと？」

「何のことって…本当に知らないのかい？」

緑髪の男性の問いに、美奈子はこくりとうなずく。

「……………ふざけているのか？あれだけ危険な目に会っておきながら、

反省してないようだな、おまえ。」

「むっ…ふざけてなんかないんだから！なんでここに来たのかわつて…私が聞きたいぐらいだつての…。鏡に吸い込まれたかと思つたら、こんな砂漠みたいなとこに来て…帰り道わかんないし…戦いに巻き込まれるし！」

美奈子は、もう嫌…と泣き出しそうな顔でへたり込んだ。

「なのに…なんでふざけてるとか言われなきゃならないのよ…。見ず知らずのあんたに！」

「…どういうことだ？」

吹雪は考え込むように腕を組んだ。

四人の間を風がザーッと通りぬけていく。

「この子はもしかして、表の世界から来たんじゃないか…？」

天砂が自問自答するように言って、

「まさか…な。表の世界の人間が裏の世界に来れるわけは無い。」

そんなことが有るわけは無いと吹雪が否定する。

「いや…今までが無かっただけで、その可能性が全く無いわけではないのかもしれない。…とにかく。話はホームに戻ってから続けるとうかが。ここに留まるのは…危険だ。」

「ホーム？」

「神風^{かみかぜ}の拠点だよ、お嬢さん。」

緑髪の男性が言って、四人はホームと呼ばれる場所へと向かった…。

「自己紹介がまだだったね。私は伊豆河涼^{いずがわりよう}。神風の現リーダーだ。コードネームは、ガーディアン。」

緑髪の男性…涼は、微笑しながら挨拶した。

「俺は筒几岳天砂^{つつぎだてんさ}。裏世界を守る隊長グループ…神風の一員さ。コードネームは、トリック隊長！」

黒髪の青年…天砂は片目ウィンクし、ピースした二本指を左こめかみに当てた。

「それから、彼が…」

「……風^{かぜ}吹雪^{ふぶき}だ。神風のメンバーの一人。コードネームは、ブリザード。」

吹雪はぶっきらぼうに挨拶し、美奈子からフツと目を逸らした。

ホームと呼ばれた場所は、二階建ての一般住宅だった。

一階には、リビングやキッチン、ダイニングやバスなどがあり、二階にはそれぞれの寝室があるようだった。

美奈子達四人は、リビングのソファに座って話をしているという状況なのだ。

「私は…水野美奈子^{みずのみなこ}です。コードネームとかは無いけど…友達からは“みな”って呼ばれてます。表とか裏とかよくわからないけど…大きな鏡に吸い込まれて気が付いたら、ここに來てたんです。」

はあとため息をつきながら、美奈子は長い自己紹介を終えた。

「あの…一体ここはどこなんですか？裏の世界って…神風って…契約者って…何なんですか？」

「どこって言われても…名前は無い場所なんだけどね。私達は、“荒廃した大地”と呼んでいる。」

（荒廃した大地って…そのままだよな。）

涼の返答に対し、美奈子はそのネーミングセンスの無さにやや呆れた。

もちろん、口には出さないが。

「神風は、裏の世界を守るエージェント…隊長グループの別名さ。」

両腕を後ろ頭の位置で組み、天砂が誇らしげに言った。

「裏の世界を守る…？」

「そうだぜ。実質的には表の世界も守っていることにもなるんだけどな。…世界に表と裏があることは、知ってるか？」

美奈子は、知らないと言を振った。

「…まあ、この辺は俺達もそこまでよくは知らないんだけど。世界ってのは一つじゃなくて、表と裏の二つの世界が、まるでコインの

裏表のように表裏一体となり存在しているらしい。二つの世界は直接的な干渉はあまり無いらしいけど、間接的に干渉し合っているらしい。例えば…裏の世界が滅びれば、表の世界も滅びてしまうといった具合に。」

（例えば…のスケールでかつ！）

心の中で突っ込む美奈子。

「…契約者というのは、人間に乗り移り暴れ回る魔物のことだ。裏の世界にのみ存在している。奴らは、表の世界に干渉できる。二つの世界の境界を跨ぎ、表を壊すことができる。また、裏の世界の安全圏を脅かす。」

「そんな契約者達から人々と世界を守るのが、神風の役目。…そろそろ代替わりの時期で、俺と現リーダーの涼さんは抜けるけど。」

明るい口調の割には、天砂の顔は曇っていた。

「そろそろって言いながら、もう二年も経ってんだよな…。」

「そうなんですか？」

「後任者が来なくてさ。たぶん…来る途中で契約者にやられたか、いざ行こうとなると怖くて逃げ出したか。そのどっちかだろうけど。」

ふうとため息ともつかない息を吐く天砂。

「…そのくらいにしておいた方がいい、天砂。諸事情を他人に…表の世界の人間に明かす必要は無い。」

「他人かどうかわからないぜ、吹雪。美奈子ちゃんが“力”を持っていたらどうするよ？」

「こいつが…？持っているようには見えないが。」

吹雪は横目でチラと美奈子を見た。

「な、何…？」

「表の世界の人間に神風の力はあるわけではない。使う必要も無いんだからな。」

「むっ… ちょっと、あんた！さっきから聞いてれば、こいつだの表の世界の人間だの… 名前で呼びなさいよ！私には“美奈子”って名前があるんだから…！」

遂に堪忍の尾が切れたのか、美奈子は立ち上がり吹雪に人差し指を突きつけた。

「なっ…。」

「邪魔だといわんばかりに、私のこと好き勝手言っ… もう怒ったんだから！帰る… あんたの嫌いな表の世界に帰ってやるんだから…！」

「…別に嫌いとは言っていないが。帰りたければさっさと帰ればいいだろ。」

「わかったわよ！そんなに帰ってほしいなら… 帰り方教えてよ！どう帰ったら表の世界に着くの!?」

「まあまあ…落ち着いて…二人とも。」

険悪モードの二人の間に、涼が割って入る。

「はあはあ…。あつ…ごめんなさい。吹雪の言い方があまりにもひどかったんで、つい…」

「…すみません、リーダー。別に悪気があるわけではなかったのに、美奈子が文句言ってきたからムツときてしまつて…」

美奈子と吹雪は、全く同じタイミングで言葉を発した。

「はは…仲いいんだか悪いんだか、さっぱりわからないな、二人とも。」

「もう名前で呼び合ってるしな。美奈子ちゃんに“力”があれば、問題は無さそうだぜ。」

「真剣なのに、からかわないで下さいよ…天砂さん、涼さん。」

苦笑する二人に、美奈子は嘆き口調で言ったのだった…。

「それはいいとして…帰り方、か。鏡から来たなら、鏡から帰れるんじゃないか？」

「あ…そっか！私…戻って鏡を探してみます！」

外に出て行こうとした美奈子を、ちょっと待ってと涼が止めた。

「窓から外を見てごらん、美奈子ちゃん。もう…外は真っ暗だ。明日にした方がいいよ。」

「えっ？…本当だ、いつの間に夜に？今の今まで明るかったのに…。

「…………裏の世界は、昼が短く夜が長い。ただ、それだけのことだ。

吹雪が端的に理由を説明した。

「夜は契約者に襲われる確率が急激に高くなる。それでも構わないなら、帰ればいい。」

「うつ…さすがにそこまでの勇氣は無いや。」

ガクリと肩を落とし、イスに座り直す美奈子。

「今日はホームに泊まったらどうだい？空き部屋があるから、遠慮は要らないよ。」

「涼さんの言う通り！女の子なら大歓迎するぜ？帰る当てが無いんだったら、泊まって行けばいいじゃん。」

涼と天砂の提案に、でも…と美奈子はためらう素振りを見せた。

「吹雪が…」

「勝手にすればいいだろ。俺には…関係無い。」

「そう？じゃ、勝手にしちゃうよ。」

美奈子はイタズラっ子っぽい笑みを浮かべて吹雪に言葉を返した。

「それじゃ、いろいろ準備してくるから少し待っていてくれるかな？」

「女の子向けにかわいく装飾してくるから、期待してな！」

そう言うと、涼と天砂は階段を駆け上がっていった。

リビングには、美奈子と吹雪の二人が残された。

…気まずい空気が流れる。

「あ、えっと…言い忘れてた。あの時…助けてくれたんだよね？あ、ありがとう…吹雪。」

「…助けた訳じゃない。戦いの妨げになるから、どかしたただけだ。」

「どかしたって…変な言い訳。ま、そういうことにしといたげるよ。あと…短い間だけでもよろしく。」

微笑みながら美奈子は手を差し伸べる。

それに対し、吹雪は

「…よろしくしたくないな。俺達の戦いに巻き込まれる前に…できるだけ、早く帰れ。」

冷たく言い放ち、自分の部屋へと歩き去って行った。

（照れてるのかな…？それとも…人間不信？なんだか…気になる。）

美奈子はそんな彼の後ろをじっと見つめながら思った。

『美奈子が来たことは、裏の世界に後に大きな影響を与えることになる。』

『彼女が来たことは、偶然か。はたまた、運命のイタズラか。知るの
のは、神様と呼ばれる存在だけである…。』

- T o b e c o n t i n u e d -

『美奈子が来たことは、裏の世界に後に大きな影響を与えることになる。』

『彼女が来たことは、偶然か。はたまた、運命のイタズラか。知るの
のは、神様と呼ばれる存在だけである…。』

鏡の誘惑 - 了 -

契約者

「229号が神風によって倒されました。」

暗い暗い洞窟の中。

顔を帽子で隠した者が、カーテンで全体を覆った主らしき者に簡潔に報告した。

「…そうか。報告、ご苦労だったな。」

「はっ。また何かあれば報告する所存であります。」

そう言つと帽子を被った者は、音も無くスツとその場から消えた。

「神風の力は確実に強くなっている…。それに加え、今年は予言の年か。…こちらでも契約者の戦闘レベルを上げ、本気にならねばならんな…」

後に残された者は、鈍く光る漆黒の水晶を眺めながら、ぼつりと呟いた…。

「やっぱり無い…。確かにここから落ちたはずなのに…。」

美奈子は空中を見つめ、はああと深くため息をついた。

そこは前日に美奈子が落ちてきた場所だった。

地面に彼女のハンカチが落ちていたので、それが目印となりわかったのだ。

「入って来た場所と単純に繋がってるわけじゃねえんだな…。鏡が移動してるとか…？」

「それこそ非現実的すぎると思うが。…鏡は、有るけれど見えないという可能性もあるな。」

（こっちの世界に来れた時点で、十分非現実的なんだけど。）

天砂と吹雪の会話には入らず、ひっそりと心の中で呟く美奈子。

「どちらにしても、無い物はどうしようもない。美奈子ちゃん…しばらくホームに居たらどうかい？」

涼が誘いかけるように訊いて、

「うーん…考えてみます。皆さんに迷惑かけるのは心苦しいので…それしか方法が無い場合はそうします。」

美奈子は曖昧に応えた。

彼女は自分自身に起きたことを理解しようとすることで精一杯のようだ。

「迷惑かけるとか、遠慮しなくてもいいぜ。ホームは俺達三人だけには広すぎるくらいだから、一人増えたところで狭くもなんないからさ。」

どうしようかと迷っている様子の美奈子に、天砂が安心させるように言った。

「えと…ありがとございます。そこまで言ってくれるなら…もう少しだけホームに居ようかと…」

「…それはダメだ。一刻も早く鏡を見つけ帰るんだな。」

「お、おい…吹雪…。それはあんまりだろ！帰れないという人間に、“帰れ”なんてよ…！」

断固として美奈子の入居を拒否する吹雪に、天砂がやや強い口調で言った。

「…どうしてもこの世界で生活するしか無いというなら、安全圏でアパートを借りる方がいい。とにかく…ホームはダメだ。」

「吹雪っ!!」

「わかったら、去れ。“力”の無い人間をホームに留めるわけにはいかないんだ。」

くるりと踵を返し、吹雪は一人ホームへと戻って行った。

「たくっ…吹雪は変なところで頑固なんだから…困ったもんだぜ。」

「美奈子ちゃん…吹雪は私達が説得するから、ホームに居ていいよ。」

涼はそう言ったが、美奈子はいいんですと首を振った。

「私…相当嫌われてるみたいだし…安全圏にも住める所があるんな

ら、そつちに住みます。」

「だけど…」

「私にもブライドってものはあります。あそこまで言われてホームに居るくらいなら、安全圏ってところに行きます。少しの間ですけど、親切にしてくれてありがとうございます。それでは、お元気で。」

涼と天砂は引き止めようとしたが、美奈子は二人を振り切って、安全圏へと走って行ってしまった。

それが反対に危険であつたとも知らずに……。

“契約者”と呼ばれている生命体は、不気味な奇声を上げながら、歩み寄って来た。

鋭く長く伸びた爪からはポタポタと透明な滴が落ち、顔は般若のようになじく歪んでいる。

元は美しい女性であったであろうそれは、今は見る影も無い。

「こ…来ないでよ！わ、私なんか食べても美味しくないんだから！」

美奈子は全身を震わせながらも、精一杯の声で叫んだ。

逃げようにも、恐怖のため金縛り状態になっている。

「キィアアア！」

「き、きゃああ！」

契約者が美奈子との距離を一気に詰めてくる。

美奈子は両手で顔を覆い、固く目を閉じた。

もうすぐ、あの鋭い爪で全身を切り裂かれて…死ぬ。

そう考えると、自然と涙が溢れて来た。

（こんなところで…たった一人で死にたくないよ…。誰か…助けて…！）

契約者は大きく右手を振り上げ、美奈子の体をその長い爪で斬り…

「ギヤアアア！！」

悲鳴を上げたのは、美奈子では無く契約者の方だった。

直後に、ピシュという嫌な音が彼女の耳に入ってきた。

「……………？なに……………？」

美奈子は両腕を顔から離し、恐る恐る目を開ける。

「…世話かける女。」

美奈子の前に立ち、契約者の攻撃を阻んだのは吹雪だった。

左手にしっかりと水色の長剣を携えている。

「吹雪……。」

「下がってる。……まだ致命傷は与えていない。」

吹雪は端的に言うと、サッと身構えた。

契約者は背中から緑色の鮮血を流しながら、恨めしげに吹雪を睨んでいる。

瞳孔は限界まで拡張し充血していた。

「オ……オノレ……吹雪……。許……サナイ……。ゾ……。」

「……許してもらおうなど考えてないがな。」

「センケツ……ヲ……ナガシナガラ……倒レルガヨイ……！」

先に動いたのは契約者。

人間には有り得ないほどのスピードで吹雪に向かって来る。

「引き……裂カレヨ……！」

「……………」

吹雪は契約者の爪の攻撃を長剣でガードする。

ガキツという金属が擦れたような音が響いた。

「吹雪……！」

「……静かに見てろ。」

「……………」

吹雪にたしなめられ、美奈子は黙った。

「余裕…ブルノモ…今ノ内ダ……………！」

「そんなつもりは微塵も無いが。」

カンツと長剣が爪を弾き返す。

契約者はザツと再び距離を置いた。

「今なら見逃してもいい。…取り憑いている人間から離れ在るべき場所に帰れ。」

「ソレハ……………デキナイ……………。人間カラ…離レレバ……………我ハ……………命ヲ失ウ……………」

「ならば、消すしかない。」

長剣を胸の前に構え、吹雪が動く。

「…青龍断！」

間合いを詰め、契約者を剣で薙ぎ払う…！

……だが。

「……………！？なっ…？」

契約者は忽然と姿を消していた。

「きゃあ！？」

直後、美奈子の悲鳴が聞こえた。

「美奈子…！」

「動クナ！コノ女ヲ……肉塊ニスルゾ！」

「くっ…。」

美奈子の首には、契約者の爪が突き立てられている。

迂闊に動くのは無謀と悟り、吹雪は剣を下ろし立ちすくした。

「ソレデ……ヨイ……。ソノママ……女ノ代ワリニ……我ガ爪ヲ受
ケヨ…！」

契約者は美奈子を捕らえたまま、吹雪に近づいてくる。

「…逃げて！私のことは…吹雪には関係無いんだから…。」

「……………」

それでも、吹雪は動こうとしない。

契約者をジッと見ているだけだった。

「吹雪！お願いだから…逃げてよ！」

「……………確かに、関係ないことだ。」

契約者は吹雪の目前まで近づいていた。

「地…伏せ…！」

契約者は大きく右腕を振りかぶる。

「おまえがこつちの世界に来なければ、の話だな。」

「えっ…？」

「伏せる！」

吹雪はヒョイとかがみ込み、攻撃を交わす。

「伏せろって…きゃっ！」

続けざまに契約者の腹部を長剣で貫く吹雪。

ドシュと貫音が響き、アアア…と耳をつんざくような断末魔の悲鳴が耳に入る。

そうして、契約者の姿は一塵の風となり消えた。

美奈子は激しくまばたきをしながら、その場にへたり込んだ。

「吹雪…今のはどういう意味…」

「見事だ、風　吹雪よ。」

美奈子が言い終わる前に、誰かが言葉を重ねるように言った。

「にほか…式穂華様。」

吹雪に名を呼ばれ、その人物は二人の前に姿を見せた。

全身は白装束で覆い、顔の半分はフードで隠しているため性別は分からない。

装束から透けて見える髪の色は、燃え盛るような紅であった。

…背丈は低く、体格も弱々しいその者は、まだ十歳に満たないかのように見えた。

式穂華が歩く度に、リン…と鈴のような音が鳴り響いている。

「久しいな、吹雪。…そちらの者は？」

射るような式穂華の視線が美奈子に移る。

「は、はい！水野美奈子です…。えっと…あなたは…」

「式穂華じゃ。そなた…表世界の人間だな？」

「…はい。鏡に吸い込まれて、こっちに来ちゃったみたいです。」

美奈子は、訴えかけるような瞳で式穂華を見返す。

「あの…式穂華様？表世界に帰れる方法とか知らないですよね？」

「不躰に…失礼だろ、美奈子。式穂華様はこの裏世界の…」

吹雪の言葉を、式穂華は右手を上げ制する。

「良いのだ、吹雪よ。美奈子とやら…そなたが表世界に帰る方法は一つだけ。鏡を探すのだ。」

「探してるんですが、見つからなくて…。」

式穂華は、見つからないので無いと美奈子の意見を否定した。

「鏡は常に存在する。…ただ、見えないだけなのだ。」

「見えない…？」

「空気と同じじゃ。空気は常に存在しているにも関わらず、人の目では見ることでできない物。」

「……………？さっぱり分からないんですけど。」

美奈子は右手で髪の毛を軽くかいた。

困った時に出る彼女の癖である。

「吹雪…よく聞くがよい。」

そう言って、式穂華は吹雪に視線を戻す。

「彼女の中に“力の芽”が見える。近々、神風として目覚めるであらう。」

「美奈子にも力が…？」

「うむ。そなたは彼女をサポートし、力を目覚めさせよ。さすれば、道は自ずと開けよう。」

式穂華は奇怪な予言を残すと、吹雪達が止める暇も無くその場を去って行った。

「待つて、まだ訊きたいことが！………って、行っちゃった。」

「力の芽…か。」

気付けば、吹雪の澄んだ瞳が美奈子を捉えていた。

「な、何よ…？」

「式穂華様の予言ならば、仕方ない。美奈子…ホームに帰るぞ。」

「へっ？」

吹雪の意見の変わり様に、美奈子は気の抜けたような声を上げた。

「帰るって…私も？」

「当たり前だ。」

「…安全圏に行けって言ったのは、吹雪じゃないの。」

「力を持ってない人間は足手まといだと感じたから、あの時はそう言っただけだ。…力の可能性を秘めているとなると、話は違う。」

「だけど…あつ。ちょっと…吹雪！」

それでも躊躇する美奈子の手を、吹雪は強引に引っ張って歩いて行くのだった…。

ホームのリビングルーム。

天砂は、二人とも無事で良かったぜとホッと息を漏らした。

「心配したんだぜ、二人とも。安全圏に行ってみるも、美奈子ちゃんの姿はどこにも無いし…ホームに帰ったはずの吹雪の姿も無かったからな。」

「…悪かったな、天砂。」

「しばらくは許してやんねえからな。」

天砂はいたずらっ子のような笑みを浮かべ、うなだれる吹雪に言葉を返した。

「で、美奈子ちゃんの件はどうなったよ？安全圏に行くなら、今度
はちゃんと護衛して連れてくぜ。」

天砂が尋ねて、

「そのことなんだが…、ホームに住ませることにした。“力の芽”
が見つかったからな。」

吹雪が端的に答える。

「へえ…なるほど。美奈子ちゃんは、やっぱりただの女の子じゃ無
かったんだね。いや、さすが私の見込んだ通りだよ。」

涼に誉められ、美奈子はそれほども無いですけどと照れくさそう
に笑った。

「…式穂華様の予言は無視するわけにもいかないからな。」

「あの人…そんなに凄い人なの？」

凄いなんてものじゃないよと、涼が答える。

「式穂華様は、世界の予言者とも運命の使者とも呼ばれている人なんだよ。」

「へえ…あんな小さな子が予言者なんですネ…。」

美奈子は式穂華の姿を思い描きながら感心したように言った。

「…式穂華様のことはそんなくらいにして、とりあえず美奈子ちゃんの歓迎会でもしようぜ？」

「か、歓迎会なんて、そんな大げさな…。」

「大げさすぎるくらいやっておかねえと足りないんさ。何たって神風のメンバーになるんだからよ。」

万事俺に任し或者说うと、天砂は台所へ歩いて行った。

「任しとけて…歓迎会なんて、本当にしなくていいのに。」

「天砂は、ああ言ったら誰が何と言おうと聞かないからね。好きにさせておくのが一番だよ。」

涼が言い聞かせるように美奈子に言った時、ちよつと手伝ってくれよーと台所から声が聞こえてきた。

「はいはい…。あつ、美奈子ちゃんはそのソファに座っててくれていいから。吹雪は手伝えよ。」

はあと浅くため息をついた吹雪を連れ、涼も台所へと向かった。

一人残された美奈子は、ソファにちよこんと座り待つことにしたのだった…。

一時間後には、盛大ってほどではないにしても、形としての歓迎会が行われたことは言うまでも無い。

式穂華に“力の芽”を感じると言われた美奈子には、さてはて…どんな力が眠っているのか。

また、彼らのまだ見せていない真の力とは…？

そして、式穂華の予言とはどのようなものか…。

謎は深まるばかりである……………。

『契約者』――

目覚め

そこは広大な墓地だった。

何百…いや、何千という数の墓石が構えられており、そのいずれにも饅頭やパンなどが供えられていた。

安全圏のスーパーからの帰り道、吹雪に連れられ立ち寄った場所が即ちそこであった。

「…この墓は事故や寿命で亡くなった者の墓ではない。」

何の脈絡も無く、唐突に吹雪が言った。

「じゃあ、何の墓だっというの？」

「……………行方不明者の墓だ。」

「行方不明者の墓…？生きていても、行方不明になったらお墓が作られるってこと？」

不思議そうに眉を潜め聞き返す美奈子。

「そうだ。表の世界じゃ考えられないだろうが…、裏の世界では一週間以上姿が見えない者は“死人”と同様に見なされる。だから、墓が作られるというわけだ。」

「行方不明者がこんなに居ても…騒ぎにはならないのかな。そもそも…これだけの数の人が行方不明ってどういうこと？」

「……………」

吹雪は一番近くの墓石をじっと見つめたまま、しばし無言だった。

「吹雪…？」

「…騒ぎにはならない。この墓を立てた者達は、理解しているからだ。」

「理解しているって…何を？」

吹雪は真剣な眼差し美奈子に向け答えた。

「行方不明になった者の多くは…契約者に体を奪われた者だということ、だ。それは…絶対的な死を表している。」

「絶対的な死…。」

美奈子は眉間にシワを寄せ、吹雪の言葉を繰り返した。

「…わかるか、美奈子？力を持つ者は…神風はこれだけ多くの命を背負って戦っている。犠牲になってきた人達のためにも…自らも命をかけて戦わなければならない。それでも…戦う意志・勇気がおまえにあるか、だ。」

「……………」

美奈子は少し考えてから答える。

「正直言って……………怖い。力を持つてことは…神風は…ただ守るだけかと思っていた。だけど……………罪の無い人を仕方なしとはいっても、手にはかけなきゃいけないんだね……………。だけど…」

「……………だけど？」

「私……………戦う。神風として…命を背負って…どちらの世界のためにも戦う！」

もし鏡が見つかったらどうするのかと、すかさず吹雪が訊く。

「えっ…そしたら、すぐに帰るけど。もちろん…戦いの決着がついた後にだけだね！」

「……………」

吹雪は何か小さく呟いたが、美奈子にはよく聞こえなかったのだ。

「んー…あんまり女の子を危険な目に合わせたくはねえけど、力を引き出すには修行するしかねえもんなあ。」

天砂は、あまり乗り気ではないようだった。

諫めるとも賛成するともつかない言葉を返すだけである。

「修行…？皆さんも修行をして、力を手に入れたんですか？」

「修行というのかわからないけど…契約者と対峙して絶体絶命…というところで、力が目覚めた気がする。」

美奈子の問いに、コーヒーをすすりながら涼が答える。

「……………」

「だからといって、無理したらダメだからね。一人で外に出て契約者を探すとか……って、あれ？美奈子ちゃんは……？」

涼の忠告が終わる頃には、椅子に座り紅茶を飲んでいたはずの美奈子の姿は無かった。

（絶体絶命のピンチを体験すれば、私にも力が目覚める……！）

そう知った美奈子は、一人で外へ出ていた。

どのくらい歩いたかは定かではないが、ホームからかなり離れた場所である。

近くだと、神風のメンバーに助けに入られると考えたからである。

（見てなさいよ…吹雪！もう足手まといなんて言わせないんだから…！）

恐怖を全く感じないということは無かったが、今の彼女を突き動かしている闘志には、他の感情は勝つことができない。

それから数メートル歩くと、岩場の後ろにサッと動く影が見えた。

「け、契約者…！？く、来るなら、来なさいよ！い、今の私には怖いものなんか無いんだから…！」

精一杯虚勢を張ってみるも、腰は完全にひけていた。

「……………」

影は岩場から出て来ない。

こちらの様子をつかっているのか。

「来ないなら…わ、私から行くからね！たああっ…！！」

護身用として持ってきた木の棒で、美奈子は岩場に向かって走る。

そして、

「えーい！」

棒を岩場に振り下ろす。

岩場に居た影は、彼女の棒をパシッと掴んで攻撃を防いだ。

「えっ…！？あなた…」

美奈子は面食らったような顔をして、慌てて飛び退いた。

その影の主とは…

「太刀筋が甘いぞ。それでは、易々かわされ、反撃されるであろう。」

「式穂華様…！」

…式穂華であった。

前に会った時と同様、顔まで白装束で隠し、表情も見えない。

彼が彼女かわらない式穂華が歩く度に、チリンチリンと鈴の音が鳴り響く。

「う、ごめんなさい。契約者かと思って…。」

「謝るでない。音に反応し、素早い攻撃を仕掛け、先手を取ったのは見事だ。…しかし、その後の太刀が甘い。攻撃を防がれたとわかったならば、すぐに離れ体勢を整えなければならない。」

式穂華は特に怒っている様子は無く、スラスラと美奈子にアドバイスした。

「は、はい…。」

「今の我との戦闘はウォーミングアップと思え。…次が本番だ。」

「えっ…?」

驚く美奈子を残し、式穂華はスッと姿を消した。

その直後、

「グルアアア…!!」

美奈子のメートルほど後ろから、雄叫びが聞こえた。

「こ、今度は本当に契約者…?」

「ガアアアア!!」

応えるように、契約者は鋭い爪の付いた腕を大きく振り上げた。

ホーム近く、荒れ果てた大地。

「美奈子ちゃん!!」

「どこに居るんだよー! 帰っておいでー!」

涼と天砂は、声を枯らして懸命に美奈子を探していた。

「やっぱり居ない…。遠くに行っただとしたら、俺らで助けられねえってのに…！」

「…放っておけ。」

吹雪はそれには参加せず、ホームの壁によたれかかって二杯目のコーヒーを飲んでいる。

「放っておけるかよ！美奈子ちゃんはまだ力を持ってないんだぜ！
？運悪く契約者に遭ったりしたら…！」

「絶体絶命のピンチ…。涼さんが言っただろ。美奈子はそれを自分から作り出そうとしている。…だったら、俺達は助けられない方があいつの為だ。」

「……………」

責任を感じたのか、涼は黙ってうなだれてしまった。

「…もういい！俺と涼さんの二人で探すから、吹雪は…」

『いやあああ…！』

天砂の言葉を遮るような凄まじい悲鳴が響いてきた。

「今の…美奈子ちゃんの声！？」

「あっちの方だ！吹雪も行くぞって…んっ！？」

天砂が吹雪の居た方を見ると、彼の姿は無く地面には飲みかけのコーヒークップが落ちていた。

「吹雪…。私達も急ぐよ、天砂！」

「あ…は、はいっす！」

置いてけぼりをくらった涼と天砂の二人も、声のした方向へと駆け

ていった。

「はあ…はあ…。」

美奈子は間一髪のところ、契約者の動きを交わしていた。

武器にしていた棒は弾かれてしまったが、体に傷を負うことだけはなんとかまのがれた様だ。

「はあ…はあ…。」

「グウウウ…!!」

契約者は、長い舌で爪をペロリと舐め上げている。

まるで、次こそは仕留めると言わんばかりだ。

（どうしよう…。棒は届かない位置に飛ばされちゃったし…。次は交
わせる自信無いよ…。）

今こそ絶体絶命のピンチではないかと彼女自身は思ったが、未だ力
は目覚めない。

ザッ…ザッ…と契約者が歩み寄ってくる。

「グルウウウ…。」

「どうしたらいいの…。」

美奈子には、後ずさることしかできない。

自分の無力さが悔しくて泣けてきそうだった。

「私には無理なんだ…。力を目覚めさせるなんて…。こんな化け物と

戦うなんて……！」

「グアアアア……！」

契約者が動く。

ドツドツと地面を揺らしながら、見た目からは想像もつかない速さで迫ってくる。

白く長い爪が美奈子を串刺しに……！

ザシュ……！！

………。

斬音が辺りに響き渡る。

だが、彼女の体に痛みは無い。

代わりに……

「…………っ。」

「えっ…！？」

彼女を庇うようにして立っていたのは、青年だった。

首の後ろでまとめられた漆黒の髪…茶色い澄んだ瞳…。

「吹雪…どうして…！！」

契約者が一旦離れたのを確認すると、気が抜けたように吹雪は地面にガクツと膝をついた。

…背中に斜め向きに引っ掻かれた傷があり、そこからポタポタと鮮血が流れ落ちている。

「…っ。本当に…どうしようも無い…っ……………奴だな……………おまえは

……。剣…構える……。っ…暇も…無かったぜ…。」

吹雪は、顔に苦渋の表情を浮かべ一言言つと、そのままドツと地面に倒れた。

「わ、私のせいで…吹雪が…。」

「美奈子ちゃん!」

「大丈夫!？」

涼と天砂が後ろから駆けて来たが、美奈子は放心しているだけだった。

「私のせい…。吹雪…私の…。」

「美奈子ちゃん、前!!」

契約者は、再び美奈子に襲いかかってきていた。

「私……………」

天砂は美奈子の前に出ようとしたが、契約者の動きの方が一瞬早かった。

「美奈子ちゃん、逃げてー！！」

「消エ口…！！」

契約者の鋭利な爪がまさに美奈子を引き裂く…

その瞬間。

カツと目も眩むばかりの、青い閃光が美奈子の体から放たれたのだった。

「クツ…………カノ目覚メカ…！！」

契約者は眩しさのあまり、両腕で顔を覆った。

「うつ…眩しいぜ…」

「本当に…彼女に力が…」

天砂と涼も思わず顔を覆う。

一人、吹雪だけは

「やっと…目覚めたか……………」

光の主を直視したまま、ポツリと呟いた。

「温かくて…強い…。これは…水の力……………」

やがて光が収束した時、美奈子の右手には白い長剣が握られていた。

吹雪の剣と似ているが、異なっただのは先がさすまたの様に二つに分かれているという点だ。

「所詮…カノ使イ方ヲ知ラヌ素人…！我が敵デハナイ。」

「…やってみなきゃわからないでしょ！」

契約者と美奈子は同時に身構えた。

「私は…戦うって決めたんだから。犠牲になった人達のためにも！」

「グオオオオ…！！！」

契約者は腕を振り上げたまま、ダダツと美奈子に向かってくる。

「今度こそ…消エロ…！」

「負けないんだから…！」

ガキッ！

美奈子は剣の刃先で、契約者の攻撃を受け止めた。

「美奈子ちゃん！今、助けに…」

「来ないで！一人で…っ…戦ってみたいの！」

「いくら目覚めたからって…無茶だ！」

「好きに…させとけ…」

駆け寄ろうとした天砂を止めたのは、いつの間にか彼の近くの岩になだれかかっていた吹雪だった。

背中 of 傷跡から流れる鮮血は、岩をジワジワと赤く染めている。

「吹雪…！おまつ…大丈夫かよ！？」

「ひどい傷だ…早く手当てを！」

心配する二人に、大丈夫だと吹雪は答え美奈子に視線を戻す。

「少し…休んでれば…血は勝手に止まる…。今は…美奈子の戦いを…見守るのが先決だ…。」

「大丈夫なわけねえだろ！？強がってないで、早くホームに…」

「水勢波！！！」

威勢の良い掛け声が、天砂達の耳に入った。

驚いて声のした方を見ると、美奈子の長剣が契約者の体を切り裂いていた。

「ナツ…我が負けタダト……？小娘コドキニ…！」

グアツと鈍い悲鳴を上げると、契約者は灰のようにスツと消え去った。

背中の傷跡から流れる鮮血は、岩をジワジワと赤く染めている。

「吹雪…！おまつ…大丈夫かよ！？」

「ひどい傷だ…早く手当てを！」

心配する二人に、大丈夫だと吹雪は答え美奈子に視線を戻す。

「少し…休んでれば…血は勝手に止まる…。今は…美奈子の戦いを…見守るのが先決だ…。」

「大丈夫なわけねえだろ！？強がってないで、早くホームに…」

「水勢波…！」

威勢の良い掛け声が、天砂達の耳に入った。

驚いて声のした方を見ると、美奈子の長剣が契約者の体を切り裂いていた。

「ナツ…我が負けタダト……？小娘ゴトキニ…！」

グアツと鈍い悲鳴を上げると、契約者は灰のようにスツと消え去った。

「小娘じゃなくて…美奈子よ。」

美奈子は言い放つと、吹雪の元に駆け寄った。

「吹雪…私のせいで、ケガさせてごめん…。大丈夫…？」

「見ての…通りだ…。致命傷…という…までには…至らなかったのが…幸いだっただ…。」

岩によたれかかったまま、顔だけ上げて吹雪が答える。

息は荒く、言葉とは裏腹に苦しげに見えた。

止血された包帯部分には、多少の血が滲んでいる。

「俺のことより…美奈子、おまえのこと…だ。なんとか…力に…目覚めた…ようで…良かった…。これで…天砂と…涼さんが…っ…。」

「吹雪！…早く、ホームに！」

天砂が吹雪に肩を貸しながら歩き、四人はホームへと足早に戻っていくのだった…。

「吹雪…ごめん…。」

明々と電気が点けられた、ホームのリビングルーム。

美奈子は、ぼつりと眩き、ホットココアの入ったカップをテーブル

に置いた。

「…心配は要らねえよ、美奈子ちゃん。ドクターが処置してくれて
つから。それに…吹雪はあのくらいの傷は耐えられるからさ。」

「うん……………」

「吹雪なら大丈夫だよ。美奈子ちゃん…自分のせいなんて思わない
でいいからね。吹雪は…彼自身の意志でやったことだから。」

天砂と涼は代わる代わるに美奈子を宿めていた。

ホームに戻った彼らは、地下室に居る“ドクター”と呼ばれる者に
吹雪の処置を任せていたのだった。

涼と天砂の二人が言うには、ドクターは“古葉”というらしい。

美奈子はまだ会ったことは無いが、ケガをした神風の治療をする医
師だという。

医師として健在する必要がある場合は、科学者として様々な実験を

するという。

故に、めったにリビングなどには顔を出さない。

「涼さんの言う通りだ。…おまえを守ったわけではない。」

「吹雪！」

小一時間ほどして姿を見せた吹雪は、腹部から背部にかけて包帯を巻いていた。

「力を目覚めさせるのに必要なもう一つの条件を満たしたただけだからな。勘違いはするなよ？」

「もう一つの条件…？」

きょとんとした表情で美奈子が訊く。

「力を心から欲することだ。人は…誰かを守ろうとする時に何らか

の力を発する。おまえが俺を守ってくれとうぬぼれたわけでは決して無いが…ケガ人を放っておくとは思わないからな。」

「そついや…俺と涼さん、それから吹雪も…同じような状況で力が目覚めたもんな。」

天井を見つめながら、思い返すように天砂が言う。

「…とにかく、だ。計算通り、美奈子は力に目覚めた。これで…涼さんと天砂が神風を引退できるというわけだ。」

「吹雪…。」

「今まで…お疲れ様でした。」

吹雪は、二人に向かって深々と礼をした。

普段の彼と違って、ほんの少し微笑みながら。

「でも、いいのかよ？今まで三人で戦っていたところを二人で戦うなんて…きついんじゃないの？」

「……………確かに。私達は別にそんなに急いで引退する必要も無いんだけど。」

天砂も涼も少々不安げな面持ちだった。

「大丈夫です。私…頑張りますから！」

答えたのは吹雪ではなく、美奈子だった。

「私…皆さんに恩返しをしたい。まだ力は上手く使えないけど…自分なりに頑張ってみます。だから…」

「いや…美奈子ちゃんの力があるとか無いとかの心配じゃなくて…」

天砂は困ったような苦笑いを浮かべ、横目で吹雪を見た。

「天砂は吹雪と美奈子ちゃんがケンカしないかって心配してるんだよ。」

「あ…そっちですか。」

美奈子は、なるほどというようにポンッと手を打った。

「…しないと言いつけられないな。」

「約束はできません。」

ほぼ同時に涼に返す二人。

「…息ピッタリみたいだし、一応は大丈夫そうだね。天砂…これも吹雪にとっていい経験かもしれないよ。」

「いまいち、頼りねえ…。まあ、決意は固いみたいだし…俺達は引退しちまうか。」

お疲れ様でした、と美奈子も礼をした。

「“予言の年”だから、大丈夫とは思っけれど…。美奈子ちゃん、吹雪が無茶しないようにしっかり補佐してね。」

「美奈子ちゃん自身も無茶しねえように、な。そいじゃ…。またな！」

吹雪と美奈子の見送りを受けながら、天砂と涼はホームから去って行くのだった…。

例の如く、リビングには美奈子と吹雪の二人が残される。

「ふう…。」

ようやく肩の荷が降りたというように、吹雪はソファーストツと腰を下ろした。

瞳は遠くを見ており、どこか悲しげだった。

「行っちゃった…天砂さんと涼さん。ねえ、吹雪？神風を引退した人達はどこに行くの？」

話しかけながら、美奈子は吹雪の真向かいに腰を下ろす。

「…安全圏に行つて、自分達の道を歩んで行く。世界を守る“神風”ではなく、一人の青年としてな。」

「そっか…。戦いなんて無い普通の生活を送るってことなんだね…。」

「そういうことだ。」

吹雪は簡潔に答えると、リモコンを使ってテレビを点けた。

「吹雪…。」

「…何？」

「式穂華様は…味方なの？敵なの？」

美奈子の質問に、吹雪は少し間を置いてから答える。

「…どちらでも無い。式穂華様は、この世界そのものだからな。」

「この世界そのもの…?」

その後も、美奈子はいくつか式穂華について質問したが、吹雪の答えは一つだった。

「人間というものが、なぜ生まれたのかと同じぐらいの謎で、俺の答える義理は無いだろ。」

と。

まるで正反対の性格の美奈子と吹雪…。

果たして、神風として上手くやっていけるのか…?

目覚めー了ー

目的

「吹雪…寒くなってきたんだけど。そろそろ帰らない？」

自分の体を抱くように両手を交差させ、身震いする美奈子。

「……………」

吹雪はそれには応えず、手を合わせ目を瞑り続けていた。

そこは、安全圏の中の大規模な霊園。

吹雪は度々ここに来て、いつも同じ墓石の前で手を合わせていた。

「ねえ、吹雪！風邪ひくつてば…。」

「……………そうだな。」

「そうだなって…。はあ…私、先に帰るね。…道覚えたし。」

「……………。」

吹雪の返答を待たず、美奈子はクルリと踵を返す。

そして、ゆっくりと歩き始めた。

ふと空を見ると、灰色の雲が徐々にこちらに流れてきていた。

…一雨きそうである。

「雨…降りそう。あー…もう!」

美奈子は呟き声とは決して言えない声で言って、

「吹雪!雨降るかもしれないから、帰った方がいいって!」

大声で吹雪を呼びに戻った。

サーッと霧雨が降っている。

美奈子は、結局降り出しちゃったとぼやきながら、髪をタオルで拭いている。

「…悪かったな。温かい粥でも食べるか?」

「もちろん、食べる!…でも、その前に一つ訊くね。あのお墓…誰

のお墓なの？」

「……………誰だって、美奈子には関係ないだろ。」

吹雪は不機嫌そうに眉をひそめると、キッチンの方へ行ってしまった。

「え…ちよつと、吹雪！気になるじゃんか…。」

美奈子は怪訝そうな顔をしたが、吹雪の後を追うことはしなかった。

恐らく、それは吹雪にとってあまり話したくない話なんだろうと感じたからだ。

次の日の朝。

美奈子がリビングに下りると、吹雪の姿は無かった。

（あれ…？吹雪…どこに行っただろう？）

テーブルを見ると、カリカリに焼かれたラスクとコーヒー、一枚のメモがあった。

「メモ…？なにになに…」
『出かけてくる。夕方までには帰ってくるが、一人で外には出るな。』か。行き先書いてないし…なんか上から目線だなあ。」

美奈子は少しムツとしながらも、椅子に座りラスクをかじる。

（ん…待てよ？吹雪が居ない今…昨日のことを知るチャンスかも！）

そう考えた美奈子は、ムツとしていたことも忘れ、にやりと不敵に笑うのだった。

（ついでにお掃除しちゃおうかと思ったけど…私が出る幕無かった…！）

吹雪の部屋に入った時の、美奈子の初感想はそれだった。

彼女の考えていた部屋は、あちこちゴチャゴチャしていた男くさい部屋だったが、予想とは全く真逆であった。

まず目に付くのが、向かって左側にある勉強机。

余計な物は一つも無く、資料やノートがきちんと整理されている。

次に、本棚。

歴史…専門書…推理小説などが種類別に、誰が見ても一目瞭然なように並べられていて、まるで書店のようだ。

それから、ベッド。

布団はピシッとたたまれており、至ってシンプルだ。上には目覚まし時計ぐらいしか置かれていない。

壁にはカレンダーしか貼られておらず、新品同様である。

（きれいな部屋…。んっ…あれは…？）

ふと、ベッドに視線を戻すと、目覚まし時計の裏に何か四角い物が見えた。

美奈子は目覚まし時計をどかし、四角い何かを手にとってみる。

（これって…）

それは写真立てだった。

縁はコルクボードのような生地で、中に吹雪と女性が並んで立つ写真が入っている。

「吹雪と……誰だろう？」

女性は吹雪と同じくらいの年に見える。

茶色と黒が入り混じった髪色で、瞳はやや紫がかった。はにかんだような笑顔が素敵だった。

「吹雪の…彼女…かな？」

誰にいうともなく、美奈子は呟く。

するとその時、

「…勝手に人の部屋を物色するんじゃない。」

すぐ後ろで声がして、写真立てを美奈子の手から奪い取った。

「あ…お帰り、吹雪。別にいいじゃない…写真しか触ってないんだから。」

「写真しか…でなくて、写真が一番触られたくないんだ。」

吹雪の言葉は弱冠の怒気を帯びていた。

「だって、吹雪が教えてくれないから…気になって仕方なくて…。」

「何をだ？」

「あのお墓の秘密だよ。その人の…家族のお墓？」

写真立てを元の位置に戻す吹雪に、美奈子が訊く。

「…………前に言っただろ。美奈子…お前には関係無い。」

「関係無いって…確かにそうだけど…。一緒に戦う仲間でしょ？ だったら、お互いのことをもっと知り合うべきじゃないの。」

「…………。」

「また黙るし。吹雪は都合が悪いと、いつも黙ってるんだから。」

「…美奈子に俺の何がわかる？」

ベッドに座りかけながら、鋭い視線を美奈子に向ける吹雪。

「えっ…」

「…………俺のことは放っておいてくれ。」

「あつ…吹雪…」

美奈子の背中をぐいぐいと押して、吹雪は部屋から追い出した。

啞然としている彼女の前で、ドアがパタンと音を立てて閉まる。

（何よ…知らないから知りたくなるんじゃないの！吹雪だって…私
のこと、何にも知らないくせに…。）

美奈子は多少むくれながら、階段をドスドス降りて行った。

そうして、ソファにドカッと座り、テレビの電源を入れようとした
時。

『きゃあああ！！』

明らかにテレビの声では無い女性の悲鳴が聞こえてきた。

ここからそう遠くは無い場所のようだ。

「な、何…？外から…？」

美奈子はチラッと階段の方を見た。

…部屋は防音になっているのか、吹雪は降りて来ない。

(……………吹雪なんか頼らなくても、戦えるよね！よし……)

美奈子は数秒で行動を決定すると、駆け足で外に出て行った。

入れ違いに、

「…美奈子。今のは…テレビの声か？…居ないのか？」

吹雪が降りてきた。

そこに居たのは、美奈子と同じくらいの年齢に見える女性と契約者だった。

黒髪の若い女性はその場に座り込んでいて、契約者は舌なめずりしながら歩み寄ってきている。

しかし、いつもの契約者と違い、まだどこか人間らしさの残る風貌だった。

「大丈夫ですか!？」

美奈子は女性に声をかけながら、守るように前に立った。

「だ、大丈夫…。あなたは…神風…?」

「今は答えてる暇はありません!とにかく、逃げて下さい!」

「わ、わかったわ…ありがとうね。」

女性は早口に礼を言うと、タタツと走り去って行った。

「私一人でも勝てるんだから…来なさい、契約者！」

美奈子は空間から水色の剣を取り出し、身構えた。

…が、

「グウ…。」

契約者は襲ってこない。

それどころか、

「タ…ス…ケ…テ…。」

苦しそうに頭をかきむしりながら、確かにそう言ったのだ。

「助けてって…」

「グアウ！」

「きゃっ!?!」

苦しがつて突進してきた契約者を、美奈子は左によけてかわす。

「オネガイ…タスケテ…。」

今度は、疑う余地も無く切ない声で言った。

「助けてって…どうすれば…?」

「ガアウ!!」

「わっ!？」

今度は、振り払うように横に腕を動かす契約者。

長い爪の先端が美奈子の頬に当たり、ピツと小さな切り傷をつくる。

「いたっ…。暴れられたら、助けられないよ…。」

「タス…ケテ…。」

改めて見た契約者の顔は、涙を流し懇願するような表情で、元の母親らしき女性のものであった。

「コドモタチ…ワタシ…オイテ…。タスケテ…」

「ごめ…なさい。助けたいけど…助ける方法を知らないから…。」

美奈子は剣を持つ手を下ろしとうつむいた。

「だけど…倒すこともできない。どうしたら…」

「ウ…………グアウウ…！」

契約者は暴れ狂いながら、美奈子に再び突進してくる。

「…………つ。」

美奈子は避けない。

それで契約者の苦しみを和らげられるなら、と考えたからだ。

「タス…ケテ…アア…！」

鋭い爪を備えた腕が振り上げられる。

次の瞬間。

ザシュ！！

「ガアアア……！」

斬音と契約者の悲鳴が響いた。

「あつ……。」

呆然とする美奈子の前でその光景は繰り広げられていた。

左腕を斬られよろよろと後ずさる契約者。

右手に携えた剣に緑の血を付着させた吹雪。

「はっ！」

吹雪は再び剣を横に薙ぎ払った。

「ウガアアア！」

契約者は胸部にそれを受け、多量の緑の血を流しながら、地へ伏し…消えていった。

「……………なんで。」

剣を持つ手をスツと下ろし振り返る吹雪に美奈子が言った。

「なんで…なんで…倒したの…？あの人…助けてって言ったのに！
！」

「……………契約者に体に乗っ取られた人間は、死んでいるも同然だ。助けることは……………できない。」

「泣いてたのに…。子供が居るって…助けてって…泣いてたのに！
！」

美奈子はぺたつと座り込み、涙を浮かべて訴えかけるように言った。

「……………」

「吹雪には…感情が無いの？何とかして助けたいって思わないの！？」

「…俺は、意志がある無いに関わらず、契約者は全て倒すと決めるんだ。戦う目的でもある。」

吹雪は冷めた瞳で美奈子を見下ろしていた。

「目的…？目的のためなら…こんな酷いことをしてもいいって言うの！？そんなの…自分勝手じゃない！」

「…彼女を助けて、代わりに彼女の家族が死ぬ。それは自分勝手じゃないのか？」

「えっ…」

予想外の質問に、美奈子は面くらったように瞳を丸くした。

「助けたら…あの人の家族が死んでいた…？どういうこと…？」

「考えればわかることだろ。一度契約者に体に乗っ取られた人間は、もう元に戻ることはできない。助けるとしたら…あのまま放っておくしか方法が無い。だが、意識はやがて完全に消失し…記憶だけが残る。そうなる…」

「……………記憶にある家族を一番に殺すってこと？契約者は無差別に人を襲うんじゃない？で、でも…それは吹雪の推測じゃ…」

「殺されかけた人間が言っているんだ。…推測ではない。」

吹雪はピシリと断言した。

その瞳は悲しげに遠くを見つめている。

「殺され…かけた…？」

「…この話は終わりにする。新手が来ないうちに…帰る方が懸命だ。」

」

「……………」

吹雪はスタスタとホームへと戻り始めた。

美奈子は彼の後ろをついて歩きながら、言葉の意味を考える。

（殺されかけたって…まさか、あのお墓の主に？それが、写真の女の人で…その人にとって…吹雪は大事だったとしたら…。そっか…だから、吹雪は…。）

数日後。

吹雪がいつものように墓を訪れると、墓の前にユリの花束が備えられていた。

怪訝に思いながら、吹雪は花束を手取る。

「きれいでしょ？…吹雪の彼女と同じ名前の…ユリの花。」

不意に、後ろから声をかけられ、吹雪は振り返る。

無論、言つまでもなく、声の主は美奈子だ。

「…………どこでその名前を？」

「この前、写真見た時…裏に名前書いてるのが見えたの。」

美奈子は、話しながら墓の前にスツと座り両手を合わせた。

「……………香波由里。名前は合っているが、彼女ではない。ただの…幼なじみだった。」

「そうなんだ？写真に仲良く写ってたから、てっきり彼女かと…。」

「…幼なじみだ。」

「そんなに否定しなくてもいいのに。せっかくだし…その“香波由里”さんについて話してよ、吹雪。」

「……………話せば、契約者を倒すことの邪魔をしないか？」

「邪魔したわけじゃないけど。とにかく話を聞いてからそれは考える。」

仕方ないと深いため息をついて、吹雪は話し始めた。

「何度も言うように、由里は俺の幼なじみだ。さっぱりしていても明るく少しお節介なやつでな。俺のことを常に心配してくれる優しい女性でもあった。」

「うん…何となくわかるかも。」

美奈子は同意するようにつなずいた。

「…だが、今から半年前に死んでしまった。契約者に体に乗っ取られて…自ら死を選んだ。」

「…………死を選んだって？」

「…半年前。それは、契約者が急速に増えだした時だった。俺はまだ力を使い始めたばかりで、未熟で…。契約者に体に乗っ取られた由里に、鋭い爪を携えた腕を向けられた。心臓を貫かれると思った刹那、由里は一時的に正気に戻ったんだ。」

「……………うん。」

「由里は俺に“自分を殺せ”と頼んできた。…俺にはそんなことはできなかった。煮え切らない俺を見て由里は…“自分にも吹雪を殺せない”と言って…………自ら命を……………」

「もういいよ…吹雪。ごめん…。」

美奈子は瞳を潤ませて、吹雪の言葉を遮った。

「…わかったなら、もう二度と俺のことを聞かないでくれ。」

「うん……………本当にごめん。でも…」

「でも…?」

「ありがと…話してくれて。話したくなかったことなんでしょ…?」

美奈子の言葉に驚いたかのように、吹雪は彼女の方をバツと振り返った。

「……………変な奴。」

「えっ?」

「俺のことを嫌いと言ったり、仲間と言ったり…。本当に変な奴。だが…嫌いじゃないな、美奈子。……………こちらこそ、ありがとな。」

美奈子は吹雪の優しい微笑みを、その時始めて見た。

困ったように眉を下げ、口元を引きつらせた妙な笑顔だったが、美奈子には吹雪が心を少しだけ開いてくれたように見えたのだった…。

目的—了—

傷だらけの青年

「……………はあ…。はあ…」

その青年は、何かから逃げるようにただひたすら荒れ果てた大地を走っていた。

焦げ茶色の短い髪は汗でべったりと額に張り付き、黒い瞳はまぶたに半分覆われ、今にも倒れんばかりの様子だった。

今時の若者を思わせるカジュアルな服は、ズタズタに切り刻まれ、所々血が滲んでいる。

彼はしばらく走り続けていたが、やがてよろよろとした足取りになつてきた。

振り返ってみると、彼を追う追っ手の姿は見えなかった。

「はあ……………なんとか…逃げ……………切れた…な……………」

ドッ！

安心して気が抜けたのか、青年は地面に崩れ落ちるように倒れたのだった。

「……………ぶ？」

声が聞こえる。

若い女性の声だ。

「……………っ」

「…大丈夫？」

今度はよりはつきりと聞こえた。

「ナイト…か…………？」

青年は尋ね、ゆっくりと目を開ける。

彼の目に映ったのは……………

「ナイトって人が誰かはわからないけど…無事…みたいで良かった
！」

茶色く短い髪を持った女性だった。

嬉しそうな微笑みを浮かべて、青年を見つめている。

「あ……れ……？ナイトじゃねえ……あんた……誰……っ！」

「起き上がったら、ダメだよ！かなり深い傷もあったんだから！」

「傷……？あ、そっか……俺……確か……」

青年は記憶を手繰り寄せてみた。

覚えていることは、“奴ら”から逃げたいて、逃げ切ったと思った直後に倒れてしまったこと。

それからは気絶していたのか、全く記憶が無い。

「ここは……どこなんだ……？」

「ここはホーム。神風の拠点……かな。あ、私は水野美奈子。何かあったかわからないけど……力になれることがあったら言ってね。」

美奈子というらしい目の前の女性は、そう自己紹介した。

青年と同年ぐらいに見えた。

「力になる、か…。サンキュな。俺は…草野　保。くさのたもつあんたが、俺を助けてくれたの？」

「う、うん…まあ。私はそこまで何したってほどじゃないけど…ほとんど吹雪が…」

美奈子は困ったように頬をかきながら、口ごもった。

「吹雪…？そいつにも礼を言わねえとな…。」

「礼なら別にいい。」

保の声に応えるように、階段から一人の男性が言葉を返してきた。

「…あんたが吹雪って人？別に礼ぐらい言わせてくれてもいいじゃんかよ。あ、俺…草野…」

「…保だろ。少し前から話は聞いていた。」

吹雪は淡々とした口調で返した。

「聞いてたなら、会話に混じればいいのに。今、自己紹介してたところなんだから。…草野君、改めて紹介するね。彼が吹雪。神風の今のリーダーの風　吹雪。」

「……………」

吹雪は怪訝そうな瞳を保に向けた。

「…なぜあんな所に居た？」

「いやー、それがさ…俺にもよくわかんねえんだ。」

「わからない…？」

「俺さ、旅人なんだ。ナイトっていう相棒と“無風の草原”でくつ

ろいでたら、何か…鬼みたいな顔した人間が襲ってきてさ。別に何
もしてねえっていうのに…。」

全く、とんだ災難だったぜと保はぼやいた。

「一応、武器は持ってたけど…奴ら、すっげえ強くてさ。しかも、
一体じゃなくて五体だぜ？勝てっこないからさ、ナイトと別行動し
て、撒こうとしたんだ。無我夢中で逃げてる内に着いたのが、ここ
だったってわけ。」

「吹雪。“無風の草原”って…ここから近いの？ケガが治ったら、
保君を送っていいこうよ。」

美奈子の提案に、吹雪はすぐには頷かず思案顔だった。

「近いと言えば近いが…危険だ。契約者だらけの“荒れ果てた大地”
を抜けて門を通る必要があるからな。」

「契約者って…あの化け物のこと？つか…自己紹介の時に言ってた
“神風”って何だよ？」

保がきよとした表情で訊いた。

「契約者というのは…」

「裏の世界にはこびる魔物！神風っていうのは、契約者を倒す組織のことだよ！」

吹雪に代わって、美奈子が簡潔に答えた。

「へえ…じゃあ、あんたらは魔物退治をしてんだ？この世界を守るために。」

「この世界だけじゃないよ。表の世界も守っていることになるの。」

誇らしげに説明する美奈子をよそに、吹雪は少しだけ顔を曇らせた。

「なんか…すつげえ。俺もさ、仲間に入れてくんねえ？旅人だから、ふらりと抜けるかもしれないけど…。ここでそいつらと戦ってたら、いつかナイトにも会えるかもしれないし！」

「えっ…でも…神風は…その…」

「ダメだ。そんな生半可な覚悟では戦わせるわけにはいかない。第一…おまえは力を持っていないだろ。」

言葉を濁す美奈子の横で、吹雪はズバツと言つてのけた。

「力…？俺、こう見えても筋肉あるぜ。契約者つつう化け物には勝てねえけど…まずは俺の手並み見てから…」

「そういう力ではない。神風として…全てを背負って戦う“力”だ。」

保は、なんだかよくわかんねえなと後頭部を軽く搔いた。

「何って言えばいいのかな…契約者と対等に戦うためには、特殊な力が必要の。吹雪はもちろん…私も最近覚醒したんだ。保君は…どうなのかな…。あつ。」

「ん？何かいい考え、浮かんだ？」

保の問いに、美奈子はうんと頷いた。

「式穂華様だよ、式穂華様！会って、素質があるか聞いてみたらどうかな？」

「…式穂華？誰だよ、それ。」

「えと…この世界の予言者って呼ばれている人かな。」

美奈子は考え考え答えた。

「美奈子…そのくらいにしておけ。何と言おうが、そいつを神風には入れられない。ケガが治るまではホームに居ても構わないが、治ったらすぐに出て行ってもらう。」

そう言うと、吹雪はスタスタと二階へ上がって行ってしまった。

「あ、吹雪！…もう。ごめんね、草野君。吹雪…本当は優しいんだけど、毒舌でさ。」

「いや、別に謝らなくてもいいぜ。悪い奴じゃねえってことはわかるし。」

保は特に気にしてないように、普通の調子で言った。

「…それはいいんだけどさ。さっきの話の続き…」

「忒穂華様のこと？」

「そうそう。どこに行ったら、会えんの？」

「どこって言われても…決まってるないかも。大抵はホームから少し離れた所かな。荒れ果てた大地をうろろしとたら、もしかしたら会えるかも。」

「じゃあ、うろろして忒穂華って奴に会おうぜ。美奈子ちゃん、案内してな。」

保は、でも…と躊躇する美奈子の背中を押し、荒れ果てた大地へと出て行ったのだった。

「あんたが弐穂華様？」

荒れ果てた大地。

保は友達に話しかけるような軽い調子で尋ねた。

「…そうじゃ。我は弐穂華。そなた…何か用か？」

弐穂華は、チリンと鈴の音を響かせながら振り向いた。

相変わらず、表情は窺えない。

「た、保君！弐穂華様には敬語で話さないと！」

「訊きたいんだけど…俺には“神風”の素質ある？」

美奈子の注意を聞かず、保は言葉を続けた。

「……………」

「答えてくれ！あんたに“素質ある”って言われないと、神風に入ってもらえないんだよ…」

「ならば、そなたも私の質問に答えよ。そなたは…何のために戦いたいのだ？」

反対に質問され、保はえっ…と面食らったような顔をした。

「何のためって…」

「理由が無ければ、戦う必要も無い。よって、力も不必要ではないか？力が必要だというのは、理由を申せ。」

「あーっと…この世界を救うのが目的の神風って…なんかカッコいいじゃんか。それに、俺…強くなりてえんだ。」

「……………」

式穂華は何か考えているかのように、黙り込んだ。

「保君…。」

「俺の相棒…ナイトは、めっちゃくちゃ強いんだ。無風の草原で契約者って化け物と戦った時…ほとんどあいつが戦ってさ。自分から囷になって、俺を逃がしてくれた。その時、思ったんだよ…俺って力ツコ悪いなって。強くかつこいい自分になりてえって。何か一つでもいいから、自分から望んで成し遂げたいって。」

「……………」

式穂華は、変わらず無言だった。

しかし、少しだけ顔を上げ保を見つめているように見えた。

「俺…ホームでは、旅人だから抜けるかもしれないとか、軽く見えたかもしれない。だけど…本当は、俺だってこの世界のために何かしたいんだ。契約者って化け物から、世界中の人を守るために。」

「……………ある。」

「へっ…？」

「そなたに素質はあると言っているのじゃ。心の奥底に熱い想いと力の芽をわずかにだが感じる。しかし…」

弐穂華は一度言葉を止めた。

美奈子は弐穂華と保の顔を交互に見ていた。

口出しするべきか否か、悩んでいるようだった。

「しかし…何だよ？」

「…足りない。戦う理由は申し分ないが、そなたは心から力を求めている。本当に戦いたいのか、そなた？」

「た、戦いたいに関まってるぜ！」

「……………ならば、戦うが良し。」

式穂華が空間に手をかざすと、そう遠くない場所からグオオオという雄叫びが響いてきた。

「なっ…あんたがあのかけ物を…？」

「…肯定も否定もしない。そなたは、自分が戦う器に値するか、一度戦って考え直してみよ。」

「あっ…式穂華様！」

美奈子は手を伸ばして式穂華を止めようとしたが、式穂華の姿はあっという間に空間に溶け込み消えてしまった。

「……………素質はあるのに、戦う勇気が無えとでもいうのかよ。」

「保君…。式穂華様は勇気が無いって言ったわけじゃなくて…」

「俺は…強くないけど、腰抜けなんかじゃねえ！」

保は怒ったような調子で言うと、雄叫びのする方向へ一心不乱に駆けて行った。

「保君！お、追いかけなきゃ…！」

慌てて、美奈子もすぐに保を追いかけていった。

吹雪は、またか…とウンザリしたような顔をして額に手を当てていた。

一階に下りると、リビングには美奈子と保の姿は無く、布団が無造

作に置かれたソファがあるだけだった。

（説教は後から嫌というほど聞かせるとして…問題は二人の居場所だな。忒穂華様の話をしていたから、探しに行ったと考えるのが妥当だが…。）

「グオオオオ…！」

考え込む吹雪の耳に、契約者の雄叫びが入ってきた。

「今のは…まさか…」

嫌な予感が胸によぎる。

吹雪はリビングの電気も消さないまま、声の方向へと走っていったのだった。

中身が飲み干されたコーヒーカップが、カランカランと音を立て床に落ちた…。

ホームから一キロ先、荒れ果てた大地。

契約者の前には、五歳ぐらいの男の子が立っていた。

ずっと泣いていたのか、両目は赤く腫れ小さな両手はびっしょり濡れていた。

「うっ…ママ…どこ…?」

「ゲウウウ…。」

契約者は、見下すような視線で男の子を見ていた。

眼は血走っているが、意識は消失していないようで、男の子に手を出すことを躊躇しているようだった。

「うりゃー!」

「又ウツ!？」

突如、背中に激痛を感じて、契約者は振り返った。

その瞳に映ったのは、厳しい目つきをした青年だった。

彼の手には、チャクラムのような断面の鋭い円盤が握られていた。

「その子から離れやがれ！」

「我ハ…マダ何モシテイナイ…」

「そんなこと知るかよ！おまえなんか…俺が倒してやる！…はっ！」

保は再び、円輪を契約者に向かって投げつけた。

契約者は、今度はゴツゴツした腕でバシッとそれをはたき落とした。

「怖いよ…ママ！」

その隙に、男の子は泣きながら安全圏へと逃げ去っていった。

「保君！危ないから、下がってて！」

彼の後を追いかけてきた美奈子は、守るようにバツと前へ出た。

「美奈子ちゃん！どいてくれよ！俺だけでこんな化け物……」

「力の無い人は危険なの！保君は勇気があるって認めるから……下がってて！」

「だけど……」

グオオオと声を上げ、契約者が美奈子に向かって来た。

「水勢波！」

美奈子は水の力を宿した剣を出し縦に振る。

すると、水のつぶてが契約者を襲った。

「グアウ!?」

契約者は、少し怯んで一旦後ろに下がった。

「美奈子ちゃん、すっげえ…」

「ヌツ…ヨクモ…ヨクモ…!! クラウガヨイ!」

今度は、空間から鞭を取り出した契約者。

「よし…俺も!…って、円輪はさっき落とされたんだ…。」

「保君、危ない!」

「んっ…? おわっ!？」

うなだれる保の目の前に、契約者の鞭の攻撃が飛ぶ。

正面からそれを受け、保はドツと数メートル弾き飛ばされた。

「保君！きゃっ！？」

続いて、美奈子にも鞭の攻撃が飛んだ。

パシッと音がして、美奈子もドツと地面に倒される。

「痛つてて…くそっ。」

「痛たた…鞭を使う契約者だなんて…。攻撃が読めない…。」

保と美奈子は、鞭で打たれた部分をさすりながら、ゆっくり立ち上がろうとする。

しかし、

「くあつ!？」

「やつ!？」

鞭は再び容赦なく飛び、二人の起き上がりを阻止する。

パシーンと高い音が響き渡る。

「愚力ナ…人間ガ…我ラ二勝トウナド…カタハラ痛イワ!!」

契約者は鞭を逆さまに持ち代える。

その先端は鋭く尖り、人間の皮膚など簡単に貫いてしまえそうだ。

「くっ…痛くて体が動かねえ…」

「ご…めん…保君…。私も動けない…守れない…」

激しい痛みに苛まれた二人に、もはや避ける力はない。

不敵な笑みを浮かべ、契約者は保に攻撃の矛先を向ける。

「マズハ…オマエダ！」

鞭が大きく振り上げられ、尖った先端が保の体を狙う。

「くそっ…俺は…俺は…！」

保が観念して目を閉じた時、

「青龍断！」

「グアッ！？！」

彼の前に、吹雪が立ちはだかったのだ。

「吹雪…！」

「保。おまえでは、契約者にはかなわない。下がっている。」

「なっ…やってみないとわからない…」

「下がれ。」

命令口調で保に言った吹雪の視線は、冷たく鋭かった。

「うっ…。」

保は思わず、身を引いてしまった。

「吹雪…我々ノ…宿敵…!!」

契約者は斬られた腕を庇いながら、反対の腕に鞭を持ち替えた。

そして、

「グオオオオ!!」

吹雪に向かって鞭を振り上げる。

吹雪はサッと左に交わした。

標的を失った鞭が、地面をパシッと叩く。

「マダダ…!!」

契約者は鞭を激しく左右に振る。

「くっ…。」

吹雪は反復横跳びの要領で、全ての攻撃を交わす。

「美奈子!!」

「…えっ？な、何？」

「くっ…っ…！ぼつつとしている暇があるなら…っ…手を…貸せ！」

呼びかけられた美奈子は、素直に助けてって言えばいいのにとぼやきながら立ち上がる。

「行くよ…水勢波！」

美奈子は契約者の背後に回り、素早く剣を振り下ろす。

滝のように激しい勢いの衝撃波が、契約者の背中を斬る。

「アアア…！？」

「青龍断！」

攻撃の手を緩めた契約者に、真っ向から吹雪が剣を振り下ろした。

「ク…我ラハ……………」

契約者は何かを言いかけたが、体は砂となり消えてしまった。

「すっげえ…強い。美奈子ちゃんも吹雪も…。それに比べて俺は…」

「保君、大丈夫？ケガは無いよね？」

地面に座ったままうつむいている保に、美奈子が近づいて声を掛ける。

「…無い。」

「良かった…。」

「俺のことより…美奈子ちゃんの方がケガをしてんじゃないか！俺を守るために…ごめん。」

美奈子は言われて始めて、右腕から血が出ていることに気づいた。

「こ、このくらい平気！保君が謝らなくても…」

「…見せてみる。」

吹雪は美奈子の腕を掴み、傷口を観察する。

「痛っ！や、優しく触ってよ…吹雪。」

「…平気じゃないだろ。かなり深い傷だ。」

「だ、大丈夫だって！…平気って言わなきゃ、保君が責任感じちゃうでしょ。」

美奈子は冷や汗をかきながら、吹雪に耳打ちした。

保が申し訳なさそうな顔で、美奈子を見つめていたからだ。

「…本当にごめん、美奈子ちゃん。それに…吹雪。」

「……………謝れば済むと思ってるのか？ケガが完治していないのにホームを出て…契約者に戦いを挑んで…。死ぬかもしれないんだぞ？関係無い人間まで巻き込んで、わかってるのか？」

「吹雪…そんなに怒らなくても…！」

「美奈子…おまえもだ。自分の力を過信するな。誰かを守りたいなら…もっと強くなつてからにしろ。」

怒られて、反抗もせず美奈子は罰が悪そうにごめんと謝った。

今回ばかりは、自分も悪かったと感じたからだった。

「美奈子ちゃんは悪くないんだ…俺が全部悪い。“力”があるって言われて…なのに勇氣は無いみたいに言われて…。ついカツとなつたんだ。だから…」

「力がある…おまえに…か？式穂華様に…っ!？」

不意に吹雪の体が前のめりになった。

「吹雪！どうしたんだよ？」

保が慌てて吹雪の体を支える。

倒れかかった吹雪の背中には、刃物で斬られた傷があり、そこから鮮血が溢れてきていた。

「くっ…美奈子…おまえ…」

「美奈子ちゃん！？なんで…」

驚く彼らの目に移ったのは、血の付いた水の剣を持った美奈子の姿だった。

瞳は虚ろで、どこか様子が変わった。

「我ハ…契約者。コノ女ノ体ヲ借りテ…吹雪…オマエヲ倒ス…」

美奈子の声で、彼女の体に乗っ取った契約者が言った。

剣を持った右腕は、吹雪に向けられている。

「美奈子…っ…！うっ…」

「お、おい…吹雪！しっかりしろよ！」

「……………」

吹雪からの返事が途切れた。

痛みと出血のため、意識を失ってしまったようである。

血の気の引いた顔色と、固く閉じられた瞼から保は理解した。

「吹雪！美奈子ちゃん…。俺…どうすればいいんだよ…？」

「吹雪ハ…倒レタカ…。ダガ…致命傷トハナツテオラヌ。ソコヲドケ…青年ヨ。」

美奈子の体を借りている契約者は、剣を携えてじりじりと保に歩み寄ってくる。

「致命傷って…吹雪を殺す気なのかよ？」

「当然ダ。吹雪ハ、我々契約者ノ憎ムベキ宿敵。仲間ヲ…タクサン消シタ。ダカラ…同ジ痛ミヲ味アワセル。」

「……………させねえ。吹雪を殺させたりしねえよ！」

保は威勢良く言って、スツと立ち上がる。

愛用している円輪は手元に無く、武器といえる物は身に付けていない。

けれど、彼は怯むことなく、契約者に乗っ取られた美奈子を睨みつけていた。

「我ト…戦ウ気ナノカ…。カモ武器モ持タナイオマエニ…何ガデキル…？」

「…おまえの言う通り、俺には美奈子ちゃんや吹雪みてえな力はない。ナイトみてえな強さも無い。けど…俺は…、もう守られるだけの人間で居たくないんだよ！誰かを守れる人間になりたいんだ！」

「愚力ナ…。ナラバ、吹雪ノ代ワリニ、死又ガヨイ。」

契約者に乗っ取られた美奈子が走る。

右手に携えた剣が、鈍く光る。

（俺には…力の芽がある。弑穂華は確かにそう言った。だったら…目覚めてくれよ、俺の力！二人を…守りたいんだ！）

どんどん迫って来る美奈子を見据え、保は心の中で念じる。

すると、

『大切な人達を守るために…戦う力をあなたに与えましょう。』

「えっ…？」

頭の中に、女性の声が響いた。

その瞬間。

「ナニ…！？」

目も開けられないほどの光が、保の体から放たれた。

淡い緑色の光だった。

「な、なんだよ、これ…？強くて温かい…力…。大地の力…？」

やがて、光が収束した時。

保の手には、緑色の光を帯びた彼の円輪があった。

「俺の円輪だ…。これと力を使って戦えっていうんだな。…わっ！
？」

保は反射的に後ろに避けた。

美奈子の水勢波が彼の足元に向けて放たれていたのだった。

「次ハ…外サヌ！」

美奈子の体を使って、契約者は再び水勢波を放つ。

「負けるかよ！」

保は負けじと円輪を投げる。

円輪は小さな弧を描きながら、衝撃波を斬った。

ピシュと音がした。

「よっし…次はこっちの番だぜ！」

戻ってきた円輪をしっかりと掴み、保は身構え直す。

「クヌッ…」

「覚悟しろよ、契約者とかいう化け物！」

「クウ…我ヲ倒セバ…コノ女モ死ヌ。ソレデモヨイノカ…！？」

美奈子は後ずさりながらも、虚勢を張り自身の心臓に剣を突き付ける。

だが、

「させるかよ！」

「グッ!？」

円輪が美奈子の手からパシッと剣をはたき落とす。

「今だ!癒やしと浄化の力…樹涙光!」

保は大声で言っ、て、円輪を上に向かって投げる。

投げられた円輪は、レコードのようにくるくる回りながら、光を放つ。

温かく優しいオーラを帯びた光が辺り一帯を包んでいく…。

「ナ…ナンド、コノ光ハ…?体ガ浄化サレ…グアアッ!!」

美奈子の体を操る契約者は、断末魔の悲鳴を上げ彼女の体から追いつ出され消えてしまった。

「あ…れ…?私……」

「おっと！」

前向きにふらつと倒れそうになった美奈子の体を、保がしっかりと抱き止める。

「大丈夫かよ、美奈子ちゃん？」

「あ…ありがとう。私…一体…？」

「契約者に取り憑かれてたんだよ。覚えてない？…いや、忘れてた方がいいんだけどさ。」

美奈子は、ゆつくりと一人で立ち、全然と首を横に振った。

「……うつ…っ…」

「あ、吹雪！大丈夫か！？」

「吹雪…！」

気が付いた様子で、体を起こそうとする吹雪に、保と美奈子が駆け寄る。

「なんとか…な。美奈子…は？」

「私は大丈夫。気を失ってたのか、何も覚えてないんだけど。」

「正気に戻った…ようだな。んっ…？」

吹雪は妙な違和感に気づき、自身の背中を数回右手で撫でた。

「傷が無くなっている…？血も止まっている…。どういふことなんだ…？」

「すっげえ…。俺の力って、傷も治せるんだな。自分でも信じられねえや。」

「おまえの力…？目覚めたのか。」

そうらしいんだよな、と保は他人事のように軽い調子で応えた。

「傷って…保君が目覚めたって…私の知らない間に何があったの？」

美奈子は、心配そうに眉を下げ問いかける。

「い、いや…まあ、いろいろとあったんだよ、うん。美奈子ちゃん
は忘れていた方がいいかと…。」

「……………覚えていないのか。おまえは、契約者に乗っ取られ…んぐ
っ!？」

「吹雪!それに、美奈子ちゃん。話は戻ってからにしようぜ!」

吹雪の口を両手で塞ぎ、保はあたふたとホームへ戻っていく。

「……………?」

怪訝そうに瞳を細めた美奈子も、とりあえず二人の後を追ってホムに戻るのだった。

「神風がまた一人目覚めたか…。」

暗い洞窟の中。

漆黒の水晶に映る映像を眺めながら、洞窟の主は呟いた。

（式穂華め…。私の指示を無視し、独断で行動し…。何を考えてそのよいなことを…！）

ダンッ！

主の拳が壁を強く叩く。

壁にヒビが入り、そこからパラパラと土が落ちていったのだった…。

傷だらけの青年…了…

気づき

20XX年、4月14日。

吹雪と一緒にホームで過ごして、一週間経った。

それで…わかったことは、吹雪は基本的に何でもできるってこと。

掃除に料理…裁縫…運動…それに勉強も。

飛び抜けてすごいってほどじゃないけど、やれって言われればできないことは無いみたい。

だけど…一つだけ苦手なことがあるってことを発見しちゃった。

それは……早起き。

『美奈子の日記より』

けたたましい音が部屋中に響き渡っている。

目覚まし時計のジリリリンという音だ。

「おはよ…うわっ！？な、なんだよ…この騒音は！」

部屋で着替えを済ませ廊下を歩いていた保は、あまりのことに両耳を塞いだ。

「おはよ…保君。吹雪の目覚まし時計の音みたいだよ…。」

階段を上ってきた美奈子が答える。

慣れているのか、両耳は塞いでいないが、困ったように眉を下げている。

「目覚まし時計！？なんで、こんな大音量なんだよ…？」

「吹雪…早起きが苦手で、わざとこうしてるみたい。……でも、まだ起きて来ないね。」

「いや、普通起きるよな…これだけうるさけりゃ。俺…起こしてる！」

耐えられなくなった保は、タタッと吹雪の部屋へ駆けた。

「あ…保君！」

どうしようか迷ったが、美奈子も慌てて追いかけた。

「吹雪！」

呼び声と共に、バンツと乱暴に部屋のドアが開けられる。

相変わらず、目覚まし時計が鳴り響いている。

…しかし、吹雪は全く起きる様子は無い。

小さな寝息を立てながら、ベッドで眠ったままだ。

「吹雪ー！いい加減に起きて、目覚まし止めてくれー！」

時計に負けない大声で、保が叫んだ。

「……………」

吹雪からの返事はない。

「保君…吹雪、起きた?」

「美奈子ちゃん…。」

部屋の中にそろりとしてきた美奈子に、保は全然と首を振る。

「強制的に起こすしかねえか。」

「どうするの?」

「まあ…美奈子ちゃんはそこで見てて!」

意味有りげにウィンクをすると、保はそつと吹雪のベッドの脇まで近寄る。

「……………?」

美奈子は言われた通り、静かに様子を見守っている。

「とりあえず…これを止めて…っと。」

保は右手を伸ばし、目覚まし時計の頭部分のスイッチを押す。

カチツ…と音がして、時計のアラーム音が止んだ。

「よし…準備オツケー。秘技布団めくり!!」

威勢よいかけ声と共に、ガバツと吹雪の布団をめくる保。

さすがに起きるだろうと思っていたが…

「……………」

吹雪は相変わらず夢の中だった。

寝返りを打っただけで、起きようとはしない。

「あれ…？これでも起きないなんて…信じられねえ！」

「寝つき良すぎだね…。」

美奈子が呆れたような顔をして相槌を打つ。

「手強いな…。次、美奈子ちゃんな。よろしく！」

「へっ？私もやるの？保君の秘策使っても起きないなら、私の方が無理だと…。それにどうしたらいいかわからないよ…。」

「物は試してやつさ。うーん…そうだな…。恋人らしく耳元で囁いてみるとか。」

「えっ！？恋人らしくって…？」

保の提案に、美奈子の声が裏返る。

「今更、照れることないだろ、美奈子ちゃん。吹雪と、そういう仲間じゃ…」

「ち、違っつてば！わ、私と吹雪は二週間前に会ったばかりだし、吹雪には好きな人が…」

頬を赤くして否定する美奈子を見て、ふうんと保はつまらなそうに返した。

「それに…吹雪は、毒舌で冷たいもん。だから好きになんかなら…」

「…うるさいな。」

その日、目覚めて初めて吹雪が発した言葉がその一言だった。

彼は上半身だけ起こし、目をこすりながら、ふわあと眠たそうにあくびをした。

「ふ、吹雪！？い、今起きたの…？」

「…起きたら悪いかな？」

「わ、悪くないけど…その…今の話、聞いてた…？」

恐る恐る問いかける美奈子に、吹雪は何のことだと訊き返す。

「聞いてないならいいんだけど…。あつ…おはよう。」

「…やっぱり仲良いんだな、美奈子ちゃんと吹雪って。」

会話に入れなかった保が、羨望と少々の嫉妬を混ぜたような調子でぼつりと言った。

その言葉が聞こえたのか聞こえなかったのか、

「二人がかりで俺を起こして何の用だ？」

吹雪は、不機嫌そうに眉をひそめ尋ねた。

「えっ？別に用事ってわけじゃないけど…目覚まし時計かけてるなら、起こした方がいいかなって。」

「美奈子ちゃんに同じー。」

戸惑い気味的美奈子と対照的に、保は自分達は悪くないとばかりにリラックスした表情だった。

「…子供ではないのだから、自分で起きれる。」

「でも、寝てたじゃんか。あれだけ大きいアラーム音だったら、普通は起きるだろ。」

「……………」

保にからかわれ、吹雪は少し黙った。

「何か用事があるんじゃないの、吹雪？急いで支度した方が…」

「何の支度だ？」

「何のって…出かけるんじゃないの？」

「別に出かける予定は無いが。二週間前から目覚ましをかけているのは…明日から始まる学校のためだ。」

吹雪は幼稚な理由と感じたのか、ふいと二人から顔を逸らした。

「つまり…早起きの練習ってことか？」

保が確認するように訊いて、

「…平たく言えばそうだな。」

吹雪が答える。

「こつちにも、学校はあったんだね…。吹雪が通うところを全く見てなかったから知らなかった。」

「ちょうど春休み中だったからな。」

「そっか…時間の流れは一緒なんだね、表の世界と裏の世界。ん…
？保君、どうかしたの？」

不思議そうな顔でこちらを見ている保に、美奈子が訊いた。

「美奈子ちゃん…表の世界から来たの？」

「うん。言ってなかったっけ…？鏡に吸い込まれて、こっちに来ちゃったんだよ。」

「へえ…表の世界の人間、初めて見た。裏の世界の人間と何も変わらないんだよな…。あつ…今度、美奈子ちゃんの世界について、じっくり聞かせてくれよ！」

美奈子は、いいよと快く返事をした。

「…おまえ達も、明日から学校に通うことになっているからな。教科書と制服は、あとで渡す。」

「そっか…私達も学校なんだ…って、えっ!？」

「おっ！俺も学校に行っているのかよ、吹雪!？」

驚く美奈子と興奮気味の保に、吹雪は落ち着くようにと促した。

「学校側の許可は取ってある。“神風のメンバー” だと言えば簡単に入れるからな。」

「どんな学校なの、それって！それに…神風ってそんなすごい権限持ってるの？」

「文武両道。それも神風として大事な使命だ。」

吹雪は有無は言わさないとばかりに、きっぱりと言い切った。

「学校か…。俺、すっげえ楽しみだぜ！旅人だから、行く機会なんて無いと思ってたからさ。」

「私はあんまり楽しみじゃないよ…。」

ガッツポーズをして喜ぶ保とは反対に、美奈子はなぜか落ち込んでいた

吹雪はそんな二人を気にする様子もなく、階段を一人降りて行くのだった…。

次の日の朝。

「早起き…できてないじゃない。」

制服姿で食パンを頬張りながら、美奈子がぼつりと言った。

「目覚ましも鳴らなかったよな。吹雪って……もしかして、遅刻魔だったりする？」

「そうかもね…。起こしに行った方がいいかな？」

「うーん……そうだよな！吹雪の推薦で入れてるみたいだし、吹雪が居ないとどうしようもない……！」

保は、ぐびっと牛乳を飲み干し立ち上がる。

「よっし！俺、起こし……」

「あつ…吹雪。」

「てくるって…へっ？」

美奈子の言葉に、後ろを振り返った彼の瞳には、階段を下りてくる吹雪の姿が映った。

「…朝から騒がしい奴らだな。」

「ふ、吹雪…！着替えてる…起きてる！？」

「だから…なんだ？」

吹雪は怪訝そうに保を見ながら、食卓に着いた。

「目覚まし時計でも起きない吹雪が…なんで普通に起きて来れるんだよ！？」

「…本番に強いタイプだからな。」

「いや…意味わからねえから！」

そんな保の突っ込みは無視し、吹雪はトーストに食パンをセットしている。

「吹雪…おはよう！ちゃんと一人で起きれるんだね。」

「子供ではないと言っただろ。当然のことだ…。」

「う、うん…そうだね。」

「…って、俺抜きで会話を続けるなよー！」

保の叫びを聞く気はあまり無いようで、吹雪は食パンを食べ始めたのだった。

保の叫びを聞く気はあまり無いようで、吹雪は食パンを食べ始めたのだった。

安全圏にある唯一の高等学校、渦波高校。

教育熱心な学校で、規則も多く、違反者には厳しい罰が用意されている。

その学校の二年三組の教室では、二人の転校生が自己紹介していた。

「えと…み、水野美奈子です。よ、よろしくお願いします。」

「俺は草野保。よろしく！」

緊張して固くなっている美奈子と、爽やかな笑顔を浮かべている保である。

「…そういうわけだ。みんな、仲良くするように。」

黒縁メガネをかけた無愛想な教師が言って、はいと生徒達が返事を返した。

「水野の席は…風の隣。草野は、深央の隣な。」

美奈子と保は、指定された席へと移動した。

「あつ…吹雪の隣なんだ。良かった…全く知らない人の隣じゃなくて。」

「……………」

嬉しそうに言う美奈子を横目に、吹雪はふっと小さく息を漏らしたのだった。

単調なリズムのチャイムが、授業の終了を知らせた。

「やっと終わった…。ここの授業…難しすぎるよ!」

うーんと背伸びをしながら、美奈子は嘆き口調で言った。

隣の席の吹雪は、特に言葉を返さず、教科書を鞆にしまっている。

「だけど、学校って楽しいよな!」

そう明るい口調で言いながら歩いてきたのは保である。

「そっか…保君は学校って初めてだったんだよね。」

「ああ！旅みたいに自由じゃないけどさ…新鮮で面白い！」

「そう言うのは、保君ぐらいかもね…。」

美奈子は呆れたような感心したような、何とも言えない表情を浮かべた。

「……………」

「あつ…帰るの、吹雪？」

スツと立ち上がった吹雪に、美奈子が尋ねる。

「…まだ帰らない、用事がある。二人共…帰りたければ、先に帰っていきな。」

「用事って…何だよ？」

「保には関係無い。」

不思議そうに訊く保に冷たく返すと、吹雪は足早に教室を出て行った。

「あつ…吹雪！」

「…ちえつ、相変わらず愛想の欠片も無えんだから。帰ろっぜ、美奈子ちゃん。」

「うん。」

会話を終えて二人が教室を出ようとした時、

「水野さん。…ちょっと、話があるんだけど。」

クラスの女子の一人が、後ろから美奈子に声をかけてきた。

黒髪を後ろでおだんごにまとめ、鞆にネコのキャラクターのキーホルダーをつけた生徒だ。

「えつと…」

「一條咲香よ。前の学校のこととか…いろいろ、話したくて。来て…もらえる？」

口調もそうだが、彼女の態度は非常に威圧的だった。

どう考えても、良い話では無さそうだ。

「何だよ…あんた？」

「草野君には関係無いわ。とにかく来て、水野さん。」

「えつ…あ、ちょっと…！」

戸惑う美奈子の腕を掴み、咲香は強引に引っ張って行ってしまった。

「…変なの。歓迎会でもやんのかな？…よくわかんねえ。」

残された保は、頭をかきながら一人呟くのだった…。

放課後の校長室。

「この度は、美奈子と保を編入させていただき、有難うございました。」

深々と頭を下げながら、吹雪が言った。

「構わないよ、吹雪君。同じ神風の誼だからね。」

校長は、ははっと笑いながらそれに応えた。

「私は、正式な後任者の代わりに、即席で二人の力持者を加えると聞いた時の方が驚いたがね。」

「…………俺も初めは迷いました。しかし、今は少しの戦力でも確保しておきたい。後任者が来れば、話はまた別ですが。」

「まあ…君がリーダーとなり、指揮を執れば、まず間違いは無いと私は思うがね。くれぐれも気を付けるように…ね。」

校長の忠告に、吹雪がはいと答えようとしたその時。

カチャリとドアノブが回り、一人の男子高校生が入ってきた。

「おや、君は…」

「吹雪！こんなところに居たのかよ…。学校中、探し回ったたぜ。」

わざと疲れたようなため息を吐いて入って来たのは、保だった。

「保…。校長先生の前だ。言葉使いには気を付け…」

「はは…構わないよ、吹雪君。今日、転校してきた草野 保君だったね。吹雪君を故意にではないにしても拘束してしまい、すまなかった。…吹雪君、急用かもしれんから、もう行きなさい。」

「…すみません。では、失礼します。」

吹雪は校長に一礼すると、早く来てくれよと急かす保と共に校長室を出た。

「何かあったのか…保？美奈子と共に先に帰ったのではなかったのか？」

「それがさ…、美奈子ちゃんがクラスの女子の一條とかいう奴に連れてかれちゃって。ホームの方に帰る人、全然居なくて…一人で帰るのはなんか寂しいだろ？」

「美奈子が連れていかれた…？何のために…どこへだ？」

吹雪の質問に、保は頭をかきながらよくわかんねえんだよと答えた。

廊下を歩く生徒達が、怪訝そうに眉を潜めて二人を見ている。

「歓迎会でもやるんじゃないの？」

「……………」

「あ、吹雪、待てよ！」

吹雪は唐突に体育館方面へと走り出した。

「吹雪まで居なくなったら、一緒に帰る奴がいらないだろ！待てってば！」

保も慌てて後を追いかけた。

人気の無い体育館裏。

「水野さん、あなた…吹雪君とどういう関係なの？」

一條咲香は、腕を組み美奈子を睨み付けていた。

「どういう関係って…」

「転校早々、吹雪君のことを呼び捨てにして…、噂では同棲しているらしいじゃないの。」

「ど、同棲！？私と吹雪が！？」

美奈子は、素っ頓狂な声を上げ驚いた。

「あら、この期に及んで違うなんて言うんじゃないでしょうね？」

「この期も何も…私と吹雪はそんなじゃありません！同棲じゃなくて同居だし…保君やドクターの古葉さんも居るのに。」

美奈子は最後の方はぶつぶつと愚痴るように言った。

「…まあ、あなたの諸事情はどうでもいいわ。それより…わかつているわよね、水野さん？ 転校生の分際で吹雪君に手出しするってことはどういうことになるか…。」

（もしかして…チクチクいじめられるとか…？）

顔を近付けて凄む咲香に、美奈子は降参するように両手を上げ身を引いていく。

しかし次の瞬間、咲香が発した言葉は意外なものだった。

「どれだけ恵まれた環境に居るのかってこと！ そんな幸せを独り占めするなんて許されないことよ！ だから…写真撮ってきて。」

「…へっ？」

美奈子は思わず妙な声を出してしまった。

てつきり、殴られるかきつい言葉を言われると思っていたからだ。

「『…へっ？』じゃないわよ、吹雪君の写真を撮ってきてって言うてるの。そうしたら、ファンクラブに入れてあげてもいいわ。」

「あの…“調子乗るな”とかって、私をいじめるんじゃない？」

「いじめ？…学園ドラマの見すぎじゃないの、あなた。確かに私は口調は厳しいし、目つきも良くはないわよ。けれど、今時そんな低レベルなことをする人間がいると思ってるの？そう思ってるなら、あなたは…ウマシカよ、ウーマーシーカ！」

毒舌だが、咲香の表情は和やだった。

「とにかく、写真を撮ってくるのがあなたのファンクラブに入る条件。それじゃ、改めて自己紹介。…一條咲香よ。咲香と呼びなさい。敬語は禁止、名字読みもね。」

「あっ…わ、私は…水野美奈子。友達からは“みな”って呼ばれて…いるよ。」

どきまぎしながらの自己紹介だったが、咲香は満足したように、それでいいのよと笑いながら美奈子の手を握った。

「一條…美奈子と何をしているんだ？」

不意に後方から男性の声が聞こえた。

「ふ、吹雪君！な、何でもないのよ！じ、じゃあね、みな！」

「あつ…咲香！」

声の主…吹雪の姿を確認した咲香は、慌てて校舎内へと去って行った。

「吹雪…どうかしたの？こんなところに、用事があったって感じには見えないけど…」

美奈子は振り返り、吹雪に問う。

「……保がうるさいから探しに来てやったんだ。美奈子こそ……一條に無理矢理連れて行かれたと聞いたが、何をしていたんだ？」

「探しに来たって……私のことを心配して……？吹雪って……意外と心配症なんだね。」

「……質問に答えろ。」

吹雪は怒ったような強い口調で言った。

その言い方と表情に、美奈子は少しムツとした。

「何よ……探しに来てくれてありがとって言おうと思ったのに！」

「礼はいいから答えろ。」

「命令口調で言わないでよ！」

美奈子は吹雪のすぐ目の前まで、ズイズイと寄った。

だが、吹雪は怯むことなく、美奈子の瞳を怪訝そうに見つめている。

「別に何してたって吹雪には関係無いでしょ！いつも、いつも…同い年のくせに…！！」

「はあ…吹雪…ちょっと疲れた…。待ってくれよ…って美奈子ちゃん！？」

タイミングがいいのか悪いのか、吹雪から見て前方から保が走って来た。

「あ…保君…。」

「う、ごめん…。何か俺…お邪魔だった？」

「えっ…？そ、そんなことないよ！」

美奈子は慌てて吹雪から離れ、保の元に駆けていった。

「か、帰るんだよね…保君？」

「うん…吹雪も一緒に帰らないのか？」

保の誘いに、吹雪は嫌そうに口元を引きつらせた。

「…一緒に？保だけならともかく…美奈子とはごめんだ。」

「なっ…私だって吹雪となんか帰りたくないわよ！行こう、保君！」

美奈子はくると踵を返すと、大股で校門へと歩いて行く。

「あ…美奈子ちゃん、待ってくれよ！…吹雪の頑固者。」

前半は美奈子に、後半はふいと顔を背けている吹雪に向かって言うて、保は美奈子の後を追いかける。

「頑固者…か。俺だって、好きでケンカしているわけではないのに…。」

一人その場に残った吹雪は、ため息混じりに呟いたのだった。

翌日の放課後、学校にて。

「みな…写真は撮ってきてくれたかしら？」

咲香は、鞆に教科書やら筆箱やらを詰めている美奈子に声をかけた。

「えっ…写真…？」

「吹雪君の写真よ。昨日、頼んだじゃないの。」

「あつ…すっかり忘れてた。」

美奈子はしょげた顔をして、ごめんと謝った。

「はあ…仕方ないわね、あなたは。」

「ごめん…。でも、別に私は吹雪のファンクラブには入る気はないから。写真も…吹雪は勘がいいから難しいかも。」

「はいはい…言い訳はもういいわ。」

咲香は、頭に手を当ててふうと息を吐きながら教室を出て行った。

「咲香…。」

「…一條と仲が良いようだな、美奈子。」

咲香の後ろ姿を見送る美奈子に、吹雪が話し掛けた。

美奈子は吹雪に視線を移し、何か用なのとっつけんどんに尋ねる。

「…一つ忠告し忘れたことがあった。友達を作るのはいいが…執着するな。」

「はっ？…何、それ。」

「勘の悪いやつだな、おまえは。つまり…だ、一人の友達に執着することは止めておけと言っているんだ。神風は…別だが。」

そう言うと、吹雪は美奈子が何か言う前にさっさと教室を出て行く。

「何よ…説明になってないじゃない。」

その時の美奈子には、吹雪の言葉の真意がわからなかった。

そして、忠告をすっかり忘れた頃に、その言葉の意味を理解するこ

とになるのだった…。

一週間後、荒れ果てた大地にて。

「なんで…。」

美奈子は、涙を見せまいとつつむいて呟いた。

両手の拳は、悔しさを耐えるかのようにぎゅっと固く握られている。

「…だから、執着するなと言ったんだ。」

視線を美奈子から逸らしてはいるが、吹雪の表情はいつもとは変わらない。

「美奈子ちゃん…。」

気の利いた言葉が浮かばず、保はただ悲しげに眉を下げているだけだった。

彼らの前には何も無かった。
だが、何も無いということが美奈子にとっては悲しくて辛いことだった。

遺体を手厚く葬ることすらできないのだ。

「咲香が…契約者になるなんて…。神風を恨んで…自分から…。悪い夢か何か…だよね…？」

「夢などではない。これは…紛れもない現実だ。」

吹雪の答えは何度訊いても同じだった。

「そっか…。咲香は…死んじゃったんだね…。現実なんだね…。あはは…こんなの…夢なわけないよね…。」

「美奈子ちゃん…？」

「大丈夫だよ…保君、吹雪。私は…笑って送り出せるから…大丈夫…。」

振り向いた美奈子にはこりと笑っていたが、瞳からはとめどもなく涙が溢れていた。

それはポタポタと落ち、地面に小さな水たまりを作っていく。

「美奈子ちゃん…本当に大丈夫…」

「大丈夫…っ…ごめん…。私…先に…うっ…帰るね…」

「あっ…美奈子ちゃん!!」

保の止めるのも聞かず、美奈子は両腕で顔を覆ったまま、駆けて行った。

「おおかた、こうなることだろうとは思っていたが…」

「美奈子ちゃん…大丈夫かな…」

「……………」

保の質問に、吹雪は答えず美奈子の駆けて行った方向をじっと見つめる。

「吹雪…励ましに行つてやれよ。彼氏なんだろ？」

「…誰が誰の彼氏だ？励まし…か。話しには行くが。」

吹雪は保に言葉を返すと、美奈子を追いかけて走って行った。

ホームの二階、美奈子の部屋前。

「うつく…咲香……………」

扉一枚隔てた部屋の中から、美奈子のすすり泣き声が聞こえる。

「美奈子…泣いているのか？」

吹雪はいつもの毒々しい口調では無く、穏やかな口調で扉越しに話

し掛けた。

美奈子はピクツと体を震わせる。

「話がある。お前は…」

「吹雪…ごめん…。私……………っ…もう…戦いたくない…。」

「……………そうか。質問する手間が省けたな。」

扉越しに返答し、用事は済んだとばかりに吹雪は階段を降りて行く。

コツコツ…という足音が美奈子の耳にもしっかりと聞こえてきた。

（咲香……………。私…これで良かったのかな……………。どうすれば……………いいの…？）

今は亡き咲香に心の中で問いかけ、美奈子は羽毛枕に顔を臥したのだった…。

「どうだった、吹雪？美奈子ちゃん…少しは元気になった？」

リビングで待っていた保が尋ねた。

吹雪は、全然と首を横に振った。

「全然って…せっかく話したんなら、説得して来いよ！もしかしたら、学校にだって来れなくなるかもしれないんだぜ！？それでもいいのかよ！」

「…それは美奈子の勝手だ。俺がとやかく言う問題じゃない。」

「だからって…！」

「俺は…あいつを元の世界に返してやろうと思う。」

脈絡の無い言葉に、保はへっと拍子抜けしたような声を出した。

「吹雪……？」

「あいつが落ち込もうがどうしようが、俺には関係無い。けれど……
わかっていたのに止められなかった俺にも責任はある。その咎を……
払拭したいだけだ。」

そう言いつと、吹雪は自分の部屋へと姿を消したのだった……。

気づき……了……

誤解と涙と…

「どうしたの、咲香？」

美奈子は、先に帰ったはずなのに不意に自分の目の前に現れた咲香に不思議そうに尋ねた。

彼女の隣に居る保も怪訝そうに咲香を見ている。

「……………神……………風……………」

咲香は質問には答えず、小さくそう呟いた。

顔は臥せられ、両手は固く握られ微かに震えている。

「咲香…大丈夫？」

「待つて、美奈子ちゃん！…何か様子が変だよ！」

咲香に駆け寄ろうとした美奈子の腕を掴み、保が引き留める。

「えっ？」

「神風………宿敵。倒………ス……！」

次の瞬間。

咲香の周りにブワアと凄まじい黒い風が巻き起こった。

「きゃっ！？」

「おわっ！？な、なんだよ…！？」

美奈子と保の二人は、三メートルほど後方に吹き飛ばされる。

しっかり踏ん張っていたため、地面に叩きつけられることはなかったのが幸이었다。

「咲香…どうしちゃったの…？」

「神風ハ…敵…！」

その時美奈子が見た咲香は、いつもの咲香では無かった。

鬼のような角、鋭く尖った歯、同じく鋭く伸びた爪…歪んだ顔…。

「そんな…！契約者に乗っ取られてるの…？」

「ウ…アアア…！！」

応えるかのように、咲香は美奈子に一気に間合いを詰める。

「美奈子ちゃん…避けて！」

「きゃっ!？」

美奈子は反射的に、右に交わした。

目標を失った咲香の爪は、ドツと地面を抉る。

「待ってて、美奈子ちゃん！俺も加勢する…！」

「ダメだよ、保君！…咲香に手を出さないで。」

「だけど…このままじゃ…！」

「お願い…保君。」

保は仕方ない…と、円輪を構えた手を下ろす。

「咲香…私はあなたを倒したくない…。目を覚まして！」

「我ハ…オマエナド…知ラナイ…！」

契約者は再び美奈子に向かってドドツと駆けてくる。

「咲香…。」

「消エ口…！」

咲香もとい契約者は、鋭い爪の生えた右腕を大きく振り上げる。

…が、美奈子は避けない。

目を瞑り、ただ俯いて立っている。

「美奈子ちゃん！」

「美奈子！」

ガッ！！

保とは異なる男性の声がして、契約者の攻撃は青い長剣に防がれた。

「吹雪……！」

「ぼつつとするな。」

吹雪は咲香との鏖迫り合い状態のまま、言葉を返した。

「仕方ないでしょ……咲香は……大事な……」

「だから、お前は無様に殺されるというのか？」

「そついう……わけじゃ……」

カントと吹雪は、攻撃を弾き返す。

「グッ…吹雪力…。」

契約者は、パツと後方に身を退く。

「大事な友達だから、なんだ？自分の命よりも大事なのか？それで、一條が救われるとでも思っているのか！」

「そ、それは…。」

今まで見たことないほどの吹雪の激しい剣幕に、美奈子は言葉に詰まった。

「吹雪！美奈子ちゃんは…！」

「保は黙っている。」

「うつ…わかった。」

保はそう言って、口を閉じた。

「神風…倒ス…。我ノ復讐…。」

咲香は吹雪達の会話の終了を待たずに、今度は吹雪の前へ詰め寄る。

「くっ…！」

吹雪は、一撃で契約者を倒そうと突きの構えをした。

しかし、

「吹雪…お願い！傷つけないで…。」

美奈子の声を聞き、思い止まった。

その隙をついて、

「死ネ…吹雪！」

「うぐっ…！？」

契約者は吹雪の腹部を腕で強打する。

「吹雪…！」

吹雪の体は薙ぎ払われ、後方に吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。

ドツと強打音がして、力なく吹雪は地面に臥す。

「…っ。」

「吹雪…！もう…見てるだけなんてできねえ…。ごめん、美奈子ちゃん！」

保は宣言するように言つと、吹雪に長い爪でとどめを刺そうとして
いる咲香の背後に回る。

そして、

「たあっ！」

気合いの掛け声と共に、円輪を投げつける。

「た、保君…ダメ！」

「グウッ!？」

円輪は、咲香の右肩に数センチほどの切り傷を付ける。

咲香は、肩を押さえ、数歩後ろに下がった。

「今だ!食らえ…神速ぞ…」

「止めて!!」

「……!美奈子ちゃん…。」

契約者咲香の前に、両手を広げ立ちはたがる美奈子。

保は驚いて攻撃を中止する。

「美奈子ちゃん…そこをどいてくれ!倒さないと…」

「…私にやらせて。」

「えっ…?」

「私が咲香を…消す。」

美奈子は静かに、けれど凜とした表情でそう言った。

「ウウ…神…風…」

「咲香。」

美奈子は、契約者咲香に優しく声を掛ける。

「ミナ…。」

「その姿になっても覚えていてくれたんだね…。短い間だったけど、ありがとう…。さよなら…。」

「止、止め…グアアッ！」

ザシュと斬音がして、契約者は粒子となって消えていった。

「はあ…はあ…。また…あの日の夢…。」

美奈子は、自分の叫び声で目を覚ました。

心臓はトクトクと早い鼓動を打ち、額からは多量の汗が流れ出している。

体はブルブルと震えていた。

「怖い…怖いよ…咲香…………。」

自分自身をギュッと抱きしめながら、美奈子は呟いたのだった…。

「吹雪い…。美奈子ちゃん、もう一週間も学校行ってないんだぜ？
なんとか元気になってくれよ！。」

木曜日の夕方。

吹雪の部屋にちゃっかり居座っている保が嘆き口調で言った。

「…そうだな。」

対する吹雪は、何か分厚い本を読みながら、一言だけ言葉を返した。

「そうだなじゃなくて！励ましの言葉かけてやれよ！」

「…保が励ましてやればいいだろ。」

「俺じゃダメなんだってば！美奈子ちゃんは…吹雪に励ましてもらうのが一番の薬なんだよ。そういうことには鈍いんだから…吹雪は。」

「…鈍くて悪かったな。今のあいつは…何を言っても無駄だろう。放っておくのが一番だ。」

吹雪の無関心な態度に、保は諦めたようにハアと深いため息をついた。

「わかった…もう、吹雪には頼まねえよ。俺が何とかしてやる。」

そう言うと、保は足早に吹雪の部屋から出て行った。

（戦いたくないという奴を励まして何の意味がある？むしろ、励ますことはせず、あちらの世界に返してやる方がいいに決まっている。）

吹雪は本を黙読しながら、心の中で呟いた。

彼が読んでいた本には、“鏡”や“表の世界”という言葉だけに赤いマーカーが付けられていたことは、本人以外に知る者は居なかった…。

次の日の朝。

「吹雪…大丈夫か？」

吹雪の無関心な態度に、保は諦めたようにハアと深いため息をついた。

「わかった…もう、吹雪には頼まねえよ。俺が何とかしてやる。」

そう言うと、保は足早に吹雪の部屋から出て行った。

（戦いたくないという奴を励まして何の意味がある？むしろ、励ますことはせず、あちらの世界に返してやる方がいいに決まっている。）

吹雪は本を黙読しながら、心の中で呟いた。

彼が読んでいた本には、“鏡”や“表の世界”という言葉だけに赤いマーカ―が付けられていたことは、本人以外に知る者は居なかった…。

次の日の朝。

「吹雪…大丈夫か？」

朝食中、何度も痛そうに胸部をさすっている吹雪に、保が心配そうに声をかけた。

カリカリに焼かれた食パンも、ほんの三分の一しか食べられていない。

「…何でも無い。戦いの中で、少し痛めたのだろう。」

「何でも無くはねえだろ…。あ、そうだ！思い切り深呼吸してみろよ、吹雪。」

「深呼吸…？」

吹雪は不思議そうに首を傾げつつも、スウと空気を吸い込む。

そして、肺が大きく膨らむまで空気が入った時、

「……っ！」

吹雪は、右手で胸を押さえ苦しそくに顔を歪めた。

「保…お前…っ…何する…」

「あ、やっぱりそっか…。吹雪…、肋骨折れてるかもしんねえよ?」

「肋骨…っ…?」

吹雪が聞き返して、保がそうと頷く。

「深呼吸して胸押さえるってことは、肋骨に負担がかかってるんだよ。旅の知識の基本でさ、医学は。」

「……………」

「この前の戦いでやっちゃんたんだろな。…吹雪、学校休んでしっ
かり病院行けよ?」

保は人差し指を前に出して母親のように言うと、吹雪が言葉を返す前に、さっさと学校へ行ってしまった。

残された吹雪は、胸を押さえたまま、

「…仕方がない…っ…か…。」

病院ではなく、ホームの地下へ繋がる階段をゆっくりと降りていくのだった…。

授業と授業の間の十分休みの時間。

「えー？吹雪君、今日休みなの？」

「うん、休み。体調不良でさ。」

隣の席で茶色いウェーブ髪を持つ女子…深央莉奈に、保は小声で言葉を送った。

深央は、吹雪フアンクラブの会員で副リーダーなのである。

「そう言えば…水野さんと草木君が来てから、吹雪君は疲れてるみたいに見えたけど…。何か関係あったりするの？」

「えっ…ま、まさかな！俺達、ただの仲良い友達なだけだし。チームとか組んでるわけじゃねえからさ！」

「チーム…？バンドか何かやってるのー？」

「い、いや、本当に関係ねえの！…あ、ほら、外！何か鳥が飛んで

来てるよ！」

冷や汗をかきながら、保は窓の外を指差す。

鳥って抽象的すぎるよと突っ込みながら、深央は指差された方向に視線を移す。

…確かに、何か白っぽい鳥が窓に向かって飛んで来るのが見えた。

「鳩じゃないのー、あれ？」

「鳩…？おっ！！もしかして…」

保は目をきらきら輝やかせ、窓を開ける。

「うわっ！？寒いぞ、草野！」

「きゃっ！？ゴミが入ってくるでしょ！」

クラスメートの何人かの文句が聞こえてくるが、保は全く気にしていない様子だった。

「恋燐！こっちだ！」

周りの騒音を物ともせず、保は鳩の名前を呼び手招きする。

言葉を理解しているのか、クルックーと一鳴きし、鳩は窓から中に入る。

そして、窓の棧にパタパタと降り立つ。

恋燐と呼ばれた鳩は真っ白で、首には赤いリボンが巻かれていた。

足には二センチぐらいに丸められた紙がくくりつけられている。

「恋燐…元気だったか？お前が来たってことは、ナイトが来るんだろっ？」

「クルックー。」

保に尋ねられ、恋燐はこれを見てくれと言わんばかりに片足を上げ紙を見せる。

「保君のペット…?」

「伝書鳩か…? いつの時代の人間だよ、草木は。」

クラスメート達は、物珍しそうに恋燐を見つめていた。

女子の何人かは、利き手を出したり引つ込めたりして、触りたそうにしている。

保は、触っても大丈夫だぜとクラスメート達に言いながら、恋燐の足から手紙を外す。

それから、丁寧に手紙を開く。

「ナイトからだよな、もちろん。あーっと……………そっか。連絡もしないで悪かったよな、俺。……………まぢかよ!？」

「あー…おっほん！盛り上がってるとこ悪いが草木…授業を始めたのだが。」

一人で百面相をしている保に、化学教師は冷やかに言ったのだった。

午後四時五分。

（もう四時なんだ…？ずっと泣いてたらお腹空いたな…。）

美奈子は、赤く腫れた瞳を軽くこすりながら、階段を降りた。

そうして、冷蔵庫からラップのかかったチャーハンを取り出しイスに座った時、

「…どんな状態でも、ご飯だけは食べるのだな、お前は。」

地下の階段を上りながら吹雪が言った。

美奈子は、意外だと言いたげに首を傾げ彼を見つめる。

「吹雪…学校は？もう終わったの…？」

「…休んだ。そのくらい察しろよ。」

「休んだって…吹雪でもサボることあるんだね…。」

誰がサボリだと返しながら、吹雪は美奈子の真前のイスに座る。

美奈子は吹雪の行動を訝しげに観察しながらも、チャーハンをレンジで温める。

「野暮用でな。サボったわけではない。」

「野暮用…？学校休んで地下から出てくる…？」

「…そうだ。他人のことよりお前の方がサボりだろ。体調が悪いわけでも無いというのに…いい加減に学校ぐらい通え。」

毒舌調だが、吹雪の表情は陰しくはなかった。

美奈子の表情が曇る。

「行きたいけど…」

「けど…なんだ？」

「……………」

無言になった美奈子を、吹雪はただじっと見つめた。

数秒経って、

「…怖いから、か？非難されることや…一條のことを思い出してしまうとでも考えているのか。」

吹雪の方から、会話を切り出した。

美奈子は、眉を下げ違うと首を振る。

「それもそうなんだけど…契約者と戦うことが怖くて。今まで深く考えなかったけど…私達のやっていることは、人間として最低なんじゃないかって思っ…」

「…そうかもしれないな。だが、神風が居なくなれば、この世界の

人間そのものが絶滅してしまう。」

「うん…わかってるよ。でも、割り切れないし…怖いし…悲しい…。
元の世界に帰りたい…」

「美奈子…。」

うつむいて肩を震わせる美奈子を見て、吹雪は無言になった。

いや、かける言葉を見つけれないのだ。

「私…帰りたい…。戦いたくない…。どうしたらいいのかな…？ね
え、吹雪…教えてよ…！」

「……………」

「吹雪…？」

美奈子の体が、悲しみとは違う意味でピクツと震えた。

吹雪が彼女の背中に覆い被さるようにして抱きしめたからである。

「俺にもわかるはずがない。だけど俺は…お前の涙は見たくない。」

「えっ…？」

「帰りたいというならば…できる限りのことはしてやる。だから泣くな、美奈子。」

美奈子の頬がほんのり赤くなる。

と、その時。

バンツという音がするほど激しく、入り口のドアが開いた。

そして、

「保はどこだ！？ここに來てるんだろ！………あつ。」

一人の女性が入って来た。

緑色のパーマ髪と赤い瞳を持つ彼女は、二人からパッと目を逸らし、

「し、失礼した!」

あたふたとホームから出て行った。

「…一体、何なんだ?」

「さ、さあ…? あ、あの…吹雪。重たいんだけど…」

吹雪は、ああ…すまないと美奈子から離れる。

それとほぼ同時に、

「…って、そうじゃなかった!」

再びドアが開いて、先ほどと同じ女性が入ってきた。

今度は出ていかず、険しい表情でツカツカと二人の前まで歩いて来たのだ。

「風　吹雪！水野　美奈子！」

「……………」

「えっ…な、何…？」

夜澤騎士は、二人に向かってビツと人差し指を突きつける。

「…私と勝負だ！そっちが勝ったら、保は神風に居ることを認める。ついでに、私も神風に入ってやる！その代わり、私が勝ったら…」

「勝ったら…なんだ？」

「…保を無理矢理にでも連れて帰らせてもらっ。私と一緒に旅に戻るといわけだ。」

「……………わかった。だが…勝負は一對一だ。美奈子は今、戦える状況ではないからな。」

吹雪の発言に美奈子は、えっ…と目をパチパチさせていた。

「吹雪…だ、大丈夫だって！私も戦い…」

「…いいだろう。そういうことなら、私と君…風　吹雪！サシで勝負しよう。」

美奈子の言葉はかき消され、話は淡々と進む。

「戦いの場所は、ここ…ホームから出てすぐの場所。時間は、今すぐでいいな？」

「…俺は構わない。」

「武器は自由。審判はセルフジャッジ。」

騎士は淡々と説明すると、サッと玄關のドアから出て行った。

「吹雪…ありがとな。」

続いて外に出ようとした吹雪に、保が礼を言った。

「…何のことだ？」

「ナイトとの決闘のことだよ。あいつ…けっこう頑固でさ。言い出したら聞かないんだ。」

「礼を言われるほどのことではない。俺自身が、戦ってみたいと思っただけだ。」

吹雪は端的に返すと、くるりと踵を返し出て行った。

「吹雪…無理すんなよ。」

「えっ？保君、今の言葉…吹雪に何かあったの？」

吹雪の背中に言葉を投げかけた保に、美奈子が訊く。

「ん…？ああ…ちょっと、気になることがあるだけだよ。」

「気になること？」

「うん。大したことじゃないんだけどさ…たぶん。それより、美奈子ちゃん。俺達も二人の後を追おう。」

保の言葉の濁し方が気にかかったが、うん…と美奈子は答え、二人もホームの外へと出たのだった。

ホームの外では、既に熾烈な戦いが始まっていた。

「たあっ！！」

騎士の槍は吹雪の横腹をかすめ、

「くっ…強いな。はっ…！」

吹雪の剣は騎士の槍を防いでいる。

カンッ、キンッと金属音がひっきりなしに聞こえた。

「す、すごい戦い…。」

美奈子は、その場に立ちすくし絶句してしまった。

「吹雪…。大丈夫かよ…本当に？」

保は、誰にも聞こえないくらいの小声で呟いた。

「くっ…さっさと負けを認めたらどうだ！」

「……っ……!？」

カンッ!…カランカラン。

双剣が吹雪の剣を弾き飛ばす。

騎士はそのまま、吹雪の眉間に剣の先を突きつけた。

「保は…ただの旅人で、私の大事なパートナーなんだ!…返してもらうよ。もし拒むなら…」

「…関係ないな。連れて帰りたいなら、勝手に連れて帰ればいい。」

「なっ…何言ってるかわかってるのか、君は!」

吹雪の発言に、騎士は目を見開きたじろいしてしまった。

その一瞬のスキに、吹雪はサッと離れ自分の剣を拾い上げる。

「だが…」

「わっ!？」

カンッカンッ!

今度は、吹雪が騎士の双剣を弾き、喉元に剣の先を突きつける。

「勝負にはこだわる。この戦いだけは…負けたくない。」

「吹雪…。」

美奈子はジッと吹雪の顔を見つめた。

何かの決意に満ちた…それでいて悲しげな表情だった。

「卑怯だ!私を油断させて、こんな…」

「ナイト…もう気が済んだだろ？」

「保…。」

保は困ったように頭をかきながら、騎士と吹雪の近くまで歩いて来た。

「全部、ナイトの勘違いなんだってば。俺は、自分で神風として戦おうって決めて吹雪や美奈子ちゃんと一緒に居るんだよ。脅されたりなんかしてねえの。」

「そんな…！嘘に決まってる！旅が大好きな保が…逃げ腰の保が…」

「うつわ…ひどい言われ様だな、俺。逃げ腰って…。」

ははっと苦笑いして、保は言葉を続ける。

「確かにさ、今までの俺は逃げ腰で弱くて…そのくせ、負けず嫌いの頑固者だった。だけど、二人に助けられて…力が目覚めて…俺は変わろうって決めたんだ。逃げてばかりじゃなくて、何かのために…大事なものを守るために戦おうってさ。」

「保…。私は…」

騎士が何かを言いかけた時。

「ウグオオオ…！見ツケタ…神風エエ…！」

彼女のすぐ真後ろから、地から響くような低い声が聞こえた。

「ナイト！危ない！」

「えっ…？つわあっ…！」

振り返ろうとした騎士は、低い声の主に強い力で羽交い締めになされた。

「ナイトっ…！」

「ナイトさん!!」

保と美奈子は、すぐさま武器を身構え、契約者に向かって駆ける。

「くっ…こんな時に…。」

吹雪は最初に気づいていたが、胸を押さえガクンと膝をついていた。

騎士との戦いで、肋骨に負担がかかりズキズキと痛み出したのである。

「えっ…だ、大丈夫、吹雪!？」

異変に気づいた美奈子は、慌てて吹雪の方に駆け寄る。

「神速斬!!」

その一方で保は、声の主…鋭く伸びた爪と鬼のような形相をした契約者に、円輪を投げつけていた。

円輪は猛スピードで回転し、契約者の腕を斬りつける。

「グオオオ！？」

反動で、騎士を拘束する腕の力が弱まる。

騎士はチャンスとばかりに、体をさっとかがめ拘束から抜け出した。

そして、双剣を拾い上げ、胸の前に構える。

「ナイト…大丈夫か！？ケガとかしてねえよな…？」

「…大丈夫。そんなことより、今は契約者とかいうあの化け物を倒すことが先決だ。」

「…お、おう。やっぱり吹雪…こっぴどなっちゃったか。」

保はチラと吹雪の方に視線を移した。

美奈子の声かけを受けながら、苦しそうに顔を歪め座り込んでいる。

「やっぱり…?」

「ナイト、前っ！前っ！」

「わっ!？」

「おわっ!？」

保と騎士は、それぞれ左右反対に避けた。

契約者の長い爪が、先ほどまで二人がいた場所の地面を砕いている。

「吹雪…弱マツテイル…。始末…簡単。先二…貴様ラカラダ!!」

「今までの奴より…強い…！」

保は、これは油断ならないとしっかりと構え直す。

「吹雪っ！吹雪ったら！」

「美奈子…っ…俺はいいから…二人を…っ！」

美奈子の手を振り払い、吹雪は痛み能耐え立ち上がる。

「吹雪！無茶だって…！私には何が何だかわからないけど…ケガしてるんじゃないの！？」

「俺のことは…放っとけ…っ…。今は…契約者を…っ！」

「吹雪…ここは俺達に任せとけっ！」

保はそう言って、吹雪にウィンクしてみせた。

「保…っ…。」

「いつも助けてもらってるからな…借りは返す…うわっ！」

契約者の強烈な攻撃が、保の足元の地面に穴を空ける。

「逃ガサヌ…。神風…ココデ…朽チ果テヨ！」

「すっげー強烈…！」

すぐに体制を立て直し、保は一度契約者と距離を置いた。

「保…大丈夫か？」

「このくらい、何ってことはねえさ。それはいいんだけど…頼みがあるんだ、ナイト。」

「我ヲ…無視スルナ…！」

ドガツと契約者の爪が再び地面を砕く。

保と騎士は、同時に後ろへジャンプして避けた。

「頼みって…何？」

「力を…解放してくれ。ナイトの本当の力をさ！」

「……………仕方ないか。」

観念したようにそう答えると、騎士は双槍を地面にガッツと突き立てる。

その間に、契約者はダダッと騎士に向かって猛スピードで駆けける。

「消エロ…人間！」

「豪雷貫！」

契約者が腕を振り上げると、騎士が叫ぶのは同時だった。

鋭利な爪が騎士の胸部を切り裂くかと思われた瞬間、ガーンと轟音が響き、双槍に雷が落ちた。

そしてその雷は、地面を伝って契約者の体を覆う。

「グッ…ウオオオ！？」

「こいつもついでに食らっとけ！神速斬！」

契約者の動きが止まったのを見計らい、保が円輪を投げる。

円輪は大きな半円を描き、契約者の脚をシュパツと斬りつけた。

「ウアアア！！」

契約者は耳をつんざくような悲鳴を上げ、やがてその姿は塵のような細かい粒子と化していった。

「ナイトさんも…神風の力を…？」

吹雪に肩を貸しながら、美奈子は口をあんぐり開けて言った。

ああ、そくだよと騎士は美奈子を振り返って言った。

「私は、“雷”の力を持っている。…どんな手であろうと、負けは負けだ。不本意だけど保も居ることだし、私も神風に入るよ。」

「ナイト…まぢかよ？大歓迎するぜ！」

保はニツと笑って、右手の親指をグツと突き出してみせた。

「吹雪も歓迎してくれるよな…って大丈夫かよ？」

和みムードの中、一人苦しそうな吹雪に気づき、保が冷や汗をかきながら言ったのだった。

「吹雪は？」

同日、午後七時十五分。

馴れない手つきで野菜を皿に盛り付ける美奈子に、保が尋ねた。

「ドクター古葉さんのところに行ってるよ。吹雪…ケガしてるならしてるって言えばいいのに。まったく…水臭いというか何というか…。」

「ハンデのつもりなのか、彼は？回復したら、また勝負を挑んでやる。」

騎士はソファに座り込み、苛立たしげに拳をぎゅっと握った。

（吹雪…言われ放題だな。）

保は二人に対して、はは…と乾いた笑いを返していた。

「人に散々嫌み言うくせに、自分の体調管理もできていないなんて…子供みたいなんだから。」

「…子供みたいで悪かったな。」

「あ…ふ、吹雪！居たの…？」

不意に背後に吹雪の気配を感じ、美奈子は引きつった笑みを浮かべた。

「吹雪…ケガが完治したら、また私と勝負しろ！次は…絶対に負けない！」

それに気づいた騎士はサッと立ち上がり、今にも噛みつきそうな勢いで言った。

「…………。」

「吹雪…疲れてるみたいだな、やけに。」

「疲れているわけではなく…全てに呆れているんだ。」

保の考察に対し、吹雪は深いため息をつきながら返したのだった…。

誤解と涙と… - 了 -

二人の予言者

「……………うつ。」

小さく呻くと、水野美奈子はゆっくりと上半身を起こした。

頭はズキズキと痛み、意識も視界もはつきりしない。

「……これは…私の部屋…？私……………帰ってきたの…？」

辺りを見回し眩くと、美奈子は目の前に立ちただかる鏡を見つめる。
鏡は、指紋や吐息でうつすら曇り、それでも美奈子の姿をはつきりと映していた。

「泣いてる…。なんで…？」

鏡に映った自分の目から流れている涙を見て、全ては夢ではなく現実だったと悟ったのだった…。

荒廃した大地に、一人の青年が倒れていた。

漆黒の髪を後ろで一つに束ねた彼は、腹部からおびただしい量の鮮血を流していた。

そしてそれは、地面を赤く円状に染めている。

瞳は固く閉ざされ、微動だにしない彼の横を、風にながされてきた落ち葉がスツと横切っていった。

左側が暗闇に塗りつぶされた月だけが、青年の姿を明るく照らし出

していた…。

「痛てて…派手に…やられちまったもんだぜ…。」

ホーム近く、荒廃した大地。

草木保は、傷だらけの左腕を右手で押さえながらヨロヨロと立ち上がる。

出血はそれほどひどくはないが、動かすと耐え難い痛みを感じた。

「まさか…あの数を相手にすることになるとは…正直考えもしなかったよ。」

夜澤騎士は、それぞれぱつきりと半分に折れてしまった双槍を見つめ、冷静に感想を述べる。

彼女は左足を引きずっていたが、それほど深手は負っていなかった。

「これで一つわかった。契約者は…表の世界と繋がる日に集まる習性がある。」

「表に干渉するため…なんだろうな。………美奈子ちゃん、表の世界に無事に帰れたかな？吹雪が…ガードとして付き添ってたから、大丈夫では思っけどさ…。」

「……………彼は不死身ではない。」

不意に二人の背後から声がした。

「へっ…！？」

「だ、誰だ！？」

驚いて振り返った二人の目に映ったのは、白装束で全身を覆った小柄な者だった。

「に、式穂華様…？」

「…彼は不死身ではない。死の危険と隣り合わせな“人間”なのだよ。」

精巧な機械のように言葉を繰り返すと、式穂華は二人が言葉を返す前に素早く去っていった…。

「……子、美奈子ってばー！帰らないのー？」

表世界での親友、志染 玲（しじみ れい）の言葉で、美奈子は授業が終わっていることに気づいた。

頭はぼうつとしていて、心はとても空虚だった。

「えっ…あ…うん。帰るよ…」

「なんか元気無いみたいだけど…大丈夫？具合悪い？」

玲は心配そうに美奈子の顔を覗き込んだ。

山吹色の髪がふわっと揺れ、茶色い瞳に美奈子の顔が映る。

「ううん…大丈夫だよ。」

「それなら…悩み事とか？帰りながらでいいから話してよ！何でも聞くからさ。」

「ありがとっ…。でも、今日は一人で帰るね…用事あるから。」

あ…ちよっと呼びかける玲を残し、美奈子はフラフラよろめきながら教室を出て行った。

「ありゃ…。鞆忘れてってるよ…美奈子。」

その場に残された玲は、美奈子の机にある鞆をひょいと腕にかけ、彼女の後を追いかけた。

同時刻、神風拠点ホーム。

「彼…まだ、目覚めないのか？」

地下室のベッドに横たわる吹雪を見下ろし、ナイトが訊いた。

ベッドの近くのソファに座っている保が、無言で首を横に振る。

「全く…反応が無えんだ。吹雪…死んじゃうのかな…。」

「……………さあ。自分に言われても…わからない。」

ナイトは特に表情を変えず言葉を返すと、保の隣に腰を下ろす。

話題の対象である吹雪は、固く目を閉じ微動だにしなかった。

左腕には点滴が繋がれており、枕元にはモニターが置かれている。

「一命はとりとめてるよ。吹雪のことだ…死にやあしないって。」

モニターをこまめにチェックしながら、ドクター古葉が言った。

この部屋の主であり、神風の専門ドクターである古葉は、長い紫色の髪を持つ女性だった。

歳は三十代後半といったところか。

白衣をラフに着こなし、聴診器をクルクル指で回す癖を持つという、あまり医者らしくない医者だった。

「…本当なのかよ、ドクター古葉？」

「あんた達よりも、吹雪との付き合いは長いんだ。彼のことは、あたしがよくわかってるさ。」

古葉は髪をかきあげながら言つと、ペンライトで吹雪の瞳を照らし始めた…。

一週間後の朝。

「いやああ!!」

美奈子は自分の叫び声で目を覚ました。

額からは冷や汗が吹き出し、顔面蒼白だった。

「はあ…はあ…またあの日の夢…。」

胸に手を当て自身を落ち着かせながら、美奈子は一週間と少し前のことを思い出していた……。

「…右半月の日だ。」

ホームのリビングルーム。

吹雪は、断定するような口調で言った。

本来は食事を使うテーブルの上には、その時は三冊の本が積まれていた。

「右半月う…？なんか、中途半端な日だよな…。」

「左じゃダメなのか…。」

保と騎士は、やや冗談めかした言葉を返す。

「それ…本当なの、吹雪？私…元の世界に帰れるの？」

美奈子が、半信半疑の表情で尋ねる。

「ああ…恐らく、だがな。常に存在するが見えない鏡…それは半分消えた月を指す。つまり、半月だ。そして、表世界は…文献上は月の右側を示している。」

「まぢかよ…。美奈子ちゃんは月から来たってことになんのか…。」

保が眉をしかめた怪訝そうな表情で美奈子を見つめる。

美奈子は、うつむいてジッと何か考え込んでいるようだった。

「次の完全な右半月の日は…明日だ。今日中にどうするか決めておけ、美奈子。」

吹雪は特に何の感情も込めずに言うと、スタスタと階段を上っていった。

「美奈子ちゃん…帰っちゃうのか、つまんねーの。」

「……………」

保はガツカリしたような表情でソファに寝転がり、騎士は無言で文献を読み返していた。

そんな中で美奈子は、

（どうしよう…？帰りたいけど…私…。）

一人、悩んでいた。

翌日、夕日が落ち、月が顔を見せ始めた頃。

「…決まったか？」

ぼんやりした表情でイスに座って紅茶をすすめる美奈子に、吹雪が問いかけた。

「うん…決めた。」

「そうか…。結局…どうするんだ？」

「……………今までありがとう、吹雪。」

和やかに微笑んでそう言った美奈子から、吹雪は彼女の答えを悟った。

「たっただいまー。ふう…結構重てえんだな、一週間分の食糧って。」

「…話は終わったみたいだな。」

タイミングよく保と騎士が帰って来た。

「保君…ナイトちゃんも…今までありがとう。私…帰るね、元の世界に。」

凜とした、それでいて穏やかな表情で、美奈子は二人に言った。

「やっぱり帰っちゃいのかよ…まぢで寂しいぜ…。」

「短い間だったけれど…私は君のことは嫌いじゃなかったよ。」

保と騎士は思い思いの感想を述べる。

頃合いはよし、と吹雪が口を開く。

「そうと決まれば…もう時間は無い。美奈子…支度はもちろんできているな?。」

「うん…準備万端だよ。」

「ならば、すぐに鏡の場所へ向かうぞ。美奈子が落ちてきたあの場所だ。」

「えっ…ち、ちょっと待ってよ、吹雪！」

先頭を切ってホームを出ようとした吹雪に、美奈子が慌てて声をかける。

「…なんだ？怖じ気づいたのか。」

「そうじゃなくて…みんなで行くつもりなの？」

「あつたり前じゃん、美奈子ちゃん。俺達も行くよ！」

吹雪に代わって、頭の後ろで腕組みをした保が答える。

「保君…。気持ちは嬉しいけど、危険だし…私は一人で帰れるから

みんなは…」

「なーに、水臭いこと言ってるんだよ。見送りしてえの、俺達三人は同じ神風の仲間なんだからさ。」

「それに、契約者から君を護衛する人間も必要だろう?」

騎士も保に同調するように言った。

「…今更引くわけにもいかないだろ。議論している暇も無い。…行くぞ、美奈子、保、騎士。」

吹雪は誘いかけるように言うと、今度こそ玄関から外へ出た。

「あー！置いてくなよ、吹雪ー！」

「保！美奈子より先に出てどうするんだよ！」

続いて、保と騎士が外に出る。

（みんな…本当にありがとう。私…この世界のこと、みんなのこと、
忘れないから…。）

美奈子ちゃんも行くよーという保の呼びかけに応え、美奈子も走って外へ出て行った。

「うわっ！早速お出ましじゃねえかよ…。」

ホームから一キロも離れていない場所で、美奈子達四人は四体の契約者に見つかり追跡されていた。

「獲物…。」

「神風…倒ス…。」

「一気二力カレ…！」

「ウオオオ…!!」

どの契約者も興奮気味で、通常では考えられない速度で四人を追ってくる。

「このままじゃ…追いつかれちゃうよ!」

「うっし…それなら。」

不意に保が立ち止まりくりと反転した。

「保君…!?!」

「ここは俺が引き受けるぜ!神速斬!!」

保は契約者達に向かって、円輪を投げつける。

円輪はクルクルと回転し、四体の契約者をシュパンと順番に傷つけていった。

「保の大バカ！……豪雷貫！！」

「ナイトちゃん！？」

美奈子と吹雪の後ろを走っていた騎士も反転し、保に加勢する。

地面に刺された双槍は自ら電流を発し、契約者達の足元を痺れさせた。

「行きな、二人とも！」

「美奈子ちゃんをしっかりと守れよ、吹雪ー！！」

二人の叫びが遠くなっていく。

「保君…騎士ちゃん………きゃっ！？」

「……………」

戸惑う美奈子の手をとり、吹雪は無言で更に速く走り始めた。

やがて、吹雪と美奈子は右半月の真下に当たる場所に着いた。

美奈子が吹雪達と最初に会った場所である。

驚くことに、その場所には美奈子の部屋と同じ鏡があつたのだつた。

「鏡……！本当にあつたんだ……。」

「……これでおまえは元の世界に帰れる。早く……鏡の中に……！！？」

「えっ……どうしたの、吹雪……。」

「……囲まれている。」

美奈子は、ええっと目を丸くして辺りを見回した。

いつの間にか、二人の半径一メートルの周を契約者達がぐるりと囲んでいたのだった。

「グウウ…吹雪…獲物…。」

「ガアアア…!!」

「ウウウ…。」

とてもとてもではないが、たった二人で勝てる数ではない。

「どうしよ…吹雪？」

「…どうしようもないだろ。相打ち覚悟で倒すしかない。」

吹雪は片手剣を右手に構え、低い姿勢をとる。

「一人じゃ無理だよ！私も…」

「いいから、おまえは早く鏡の中に…っ!？」

カンッ！

痺れを切らした契約者の一体が、吹雪に襲いかかる。

だが、長く鋭い爪は吹雪の剣によって弾かれた。

それを合図としたかのように

「グアアア!!」

「倒スウウ!!」

「神風…憎イイイ!!」

他の契約者達も吹雪と美奈子に向かって駆けてくる。

「青龍断!!」

「ガアアアッ!?!」

吹雪は目前の契約者の胸部を剣で断ち、すぐに身を翻し右側の約者の背中に斬りつけた。

「グアッ!?!」

「ウオオオオ!!」

けれど、契約者は怯むことなく次々と向かってくる。

「きゃあ!?!」

「美奈子!!」

三体の契約者が美奈子を鋭い爪で突き刺そうとしていた。

ドスツドスツドスツ！

…貫音が二度響く。

美奈子は思わず閉じてしまった瞳を、ゆっくりと開ける。

すると…

「くっ…っ。」「

「あっ…ああ…吹雪いいいい！！」

自らを盾にして、美奈子の代わりに契約者の攻撃を受けた吹雪の姿があった。

腹部と両胸部を契約者の爪に深々と貫かれている。

傷口からポタポタと溢れ出す鮮血は、見る見る内に流れ落ちる量が

増えていった。

「いや…いやああ!！」

「…っ…美奈子……………」

吹雪は力を振り絞って、美奈子の背中を右肘でトンツと押す。

「あつ…。きやあああ…!？」

美奈子の体は鏡の中へと落ちていく。

美奈子を飲み込んだ鏡は、まるで始めから何も無かったかのように
跡形も無く消えてしまった。

(美奈子…おまえだけは……幸せに……生きる…よ……………。)

「氷…地獄…!」

爪が体から引き抜かれたタイミングで、吹雪は剣を高く掲げ叫んだ。それに応え、地面から何十本ものつららが出現し、契約者達を檻のように捕らえていく。

「ナニ…！？」

「又アアア！？」

「ギャアア！」

契約者達は断末魔の悲鳴を上げ…やがて全て消えた。

「美奈…子……………」

ドサッ！

吹雪の体は、うつぶせの姿勢で地面に崩れ落ちたのだった……………。

（吹雪…死んじゃ嫌なんだから…。）

悪夢から覚めた美奈子は、気分転換にと街を散策していた。

…しかし、イマイチ気分は晴れなかった。

かわいらしい看板を掲げているファッション店も、美味しいパフェが食べられるカフェも…今の美奈子にとっては、何もかもどうでも良かった。

（吹雪…会いたいよ…。毒舌で冷たくて…けれど根は優しい吹雪…。
私…あなたのこと…）

ドンッ！

目線を地面に向けていた美奈子は、道行く誰かにぶつかってしまっ

た。

「きゃっ！」

ぶつかられた者は、反動で大きく後ろによろける。

「あっ……ごめんなさい！」

美奈子は申し訳なさそうに頭を下げた。

ぶつかられた人間は、

「あ……いえ！わたくしもぼうつとしていたので……こちらこそすみません。」

律儀に状況を説明して、謝り返してきた。

「あ……。」

美奈子とぶつかった人間…淡いクリーム色の髪を持つ女性は、美奈子の顔をまじまじと見つめた。

「えっ…私の顔に何か付いてますか？」

美奈子はきょとんとした表情で、女性に尋ねる。

「いえ…。あの…今、時間ありますか？突然で何なのですけど…あなたと少し話がしたいです。」

「あっ…は、はい。構いませんよ。」

返事を得ると、女性は嬉しそうに目を輝かせ、美奈子を喫茶店へ案内した。

喫茶店エルミナーデ。

フランスのカフェをモチーフとした喫茶店で、女性に人気が高い場所である。

「わたくしは、ハーブティーをお願いいたします。」

「私はコーヒーで。」

女性と美奈子は向かい合うようにして、テーブルについた。

店員が注文を承り去って行ったことを確認し、女性が口を開く。

「…強引にお誘いしてしまつてすみません。自己紹介もまだでしたね…。わたくしは伊穂華^{いほか}と申します。この世界の忒穂華ですわ。よろしく願いいたします。」

「えっ…忒穂華様…？あっ…わ、私は水野美奈子です。よろしくお願いします…。」

多少面食らいながらも、美奈子も挨拶を返した。

「やはり…忒穂華様をご存知でしたか。水野美奈子さん…あなたは、裏の世界の人間なのですか？」

「と、突然そんなこと言われても…何のことだか…」

「わたくしは笑ったりしませんから、隠さないでください、美奈子さん。」

真剣な表情で返す伊穂華を見て、美奈子は惚けても無駄ということ悟った。

「…はい。鏡に吸い込まれて、つい一週間前まで裏の世界に居ました。でも、どうしてわかるんですか？」

「…匂いですよ。裏の世界に満ちる死の匂い…あなたからも漂ってきたんです。わたくしも…あの世界の住人でしたから、わかるんです。」

「伊穂華さん…何もかも知ってるんですか？」

ええ…もちろんと伊穂華が答えた時、店員がハーブティーとコーヒーを運んできた。

店員は訝しげに二人を見ながらも、何も聞かなかったかのようにすぐ去っていった。

「わたくしは…かつて、裏の世界の予言者でした。」

「えっ…じゃあ、式穂華様は…？」

「……………あの方は、わたくしを守るために予言者になったのです。」

伊穂華は悲しげに目を伏せると、式穂華と自分の関係を話し始めたのだった。

「…わたくしは三年前、式穂華様の仕事を行っていました。表向きは予言者ということになっていますが…本当はより強い契約者を出現させ、神風を倒すことが仕事なのです。」

「そっだったんですか…。だから、式穂華様…。」

美奈子は何か思い当たることがあるように、ぽつりと呟いた。

「けれどある日、嫌になったんです。人を悲しませることしかできない仕事が…。だから、総主様…契約者を司るお方に申し上げたのです。わたくしは、もうこんなことは辞めたい、と。」

「……………」

「総主様は、それはそれは恐ろしい形相でわたくしを睨むと、『おまえは使えない言者だ。…死ぬがよい。』そう冷たく言い放ちました。そして、わたくしに剣を向け殺そうとしたのです。」

「そんな…！ひどい…。」

「いえ…総主様が怒るのも当然です。わたくしが悪いんですから。…剣の先が鈍く光って胸元に近づいてくるのがわかりました。ああ、わたくしはもうすぐ死んでしまうんですね…そう思った時、『待て。』と背後から留める声が聞こえたのです。その声の主が…忒穂華様でした。」

伊穂華はそこで一度言葉を止め、ハーブティーを少しだけすすった。

「総主様はピタリと手を止め、忒穂華様を睨みつけて言いました。『何者だ、貴様は？』と。忒穂華様はすぐにお答えしました。『我

は式穂華。その者は私の姉だ。私が代わりに務める。だから、姉を見逃してくれ。』と。」

「兄弟だったんですか…式穂華様と伊穂華さん。」

「いいえ、兄弟どころか、顔も合わせたけとは有りません。式穂華というお名前も…偽名らしいのです。わたくしを助けるために、あの方は嘘をついたのです。」

今度は美奈子がコーヒーをぐくりと飲んだ。

「総主様も、嘘だと見破っていたのでしょね。嘘だとわかっていながらも…なぜかその条件を飲んだのです。すなわち、式穂華様を新しい予言者として雇い、わたくしを見逃してくれました。ただし…」

「ただし…?」

「…わたくしは表の世界に追放。式穂華様が妙なことをしたら、わたくしを跡形も無く消し去るという契約をさせて。こうして、わたくしはあの世界を追放され、あの方が予言者として君臨しているというわけです。」

「……………」

美奈子は、返す言葉が見つからなかった。

（式穂華様に、こんな秘密があつたなんて…。）

三年間、式穂華がどんな気持ちで予言者をやってきたかを考えると、何とも言えない気分になつたからである。

「わたくしばかり、話してしまいましたね…。美奈子さん、次はあなたの話を聞かせてもらえませんか？わたくしへの質問でも構いませんよ。」

「私の話が質問、ですか…？」

「ええ。あなたは、わたくしが予言者だつた者と知つた以上、何か訊きたいことができるはずですよ。…話したいことがあるはずですよ。」

伊穂華は、柔らかに微笑んで言った。

美奈子は、じゃあ…と口を開く。

「裏の世界に帰る方法…教えてもらえませんか、伊穂華さん。私…どうしても会いたい人が居るんです。戻ってきて気づいた…私にとつてかけがえのない人が。」

「かけがえのない人…。あなたはその方が好きなんですね。」

「…………はい。いつもケンカばかりしてて、毒舌で冷たいけど…私のことを命がけで守ってくれる優しい人なんです。あの夜も…私を助けようとして…。せめて、無事なかだけでも知りたいんです。」

「あなたの想い…十分伝わってきました。…鏡です。あちらの世界で右半月になる日に、鏡の前に立つのです。次の転移日は…明後日。時間は午後七時ですよ。」

美奈子は、本当ですかと目を輝かせた。

「ええ、ほぼ間違いないと思います。」

「ありがとうございます、伊穂華さん！」

「どういたしまして、美奈子さん。またこちらに戻って来たら…お話ししましょうね。」

伊穂華は美奈子とそう約束して、式穂華と同じリン…という鈴の音を鳴らしながら、別れたのだった…。

二日後、午後六時五十九分。

美奈子は、自分の部屋にある大鏡の前に立っていた。

鏡には、決意に満ちた顔をした自分が映っている。

壁時計のチツ…チツ…という針の音だけが美奈子の耳に響いていた。

…まもなく、七時になる。

（きっと…吹雪は怒るだろうなあ。でも…私…会いたい。吹雪の聲が聞きたい。側に居たい…。）

チツ…チツ…チツ…カチツ……………。

長い針が、十二を指した。

その瞬間、

「あっ!?!」

鏡から凄まじい風が吹き荒れてきた。

そして、

「きゃあ…!?!」

鏡は美奈子の体をあつという間に吸い込んでしまった…。

……。

……。

……。

「うつ…痛たた…。ここは…裏の世界、リバーシア…？」

美奈子は起き上がると、辺りをキョロキョロと見回した。

そこは荒れ果てた大地。

最初に転移した場所かは定かではないが、裏の世界であることは確かだった。

「帰って来たんだ…私…。行かなきゃ…！」

美奈子は全速力で駆け抜けた。

吹雪へ会いたいと、その気持ちだけを胸に……………。

ホーム、地下室。

「今日でもう一週間だよ…。吹雪は目覚めないし、美奈子ちゃんは帰っちゃうし…もうどうしたらいいんだよ…。」

長イスに座って、一人嘆く保の姿があった。

吹雪は、この一週間全く目覚める様子は無く、ベッドに横たわり続けていた。

モニターで見る限り、呼吸は平静で心拍数にも問題はない。

けれど、意識が戻ることは無かった。

「まあ、人間も動物さ。冬眠していると思えば、気にするほどのことでもないだろ？」

ドクター古葉はそう冗談混じりに言うが、保は心配で仕方がないようだった。

気分転換に出かけようという騎士の誘いを断り、今もこうして苦悩しているのである。

（やっぱり…美奈子ちゃんが居ないとダメなんだろうな…吹雪は目覚めないんじゃないかって、目覚めたくねえのかもしれない…。）

「はあ…美奈子ちゃん…。帰ってきてくんねえかな…。」

保がそう言った時。

ピンポン…とチャイムの音が音が鳴った。

「……………？ナイトがわざわざチャイム押すわけねえよな…。」

保は、階段をタタツと駆け上がり、玄関のドアをカチャリと開けた。

するとそこには…

「はあ…はあ…保君！」

「み…美奈子ちゃん！？」

息を切らして美奈子が立ちすくしていた。

「お、おかえり。」

「たっ…ただいま。」

保と挨拶を交わすと、美奈子はホームの中へ入る。

「美奈子ちゃん…まぢで帰ってきたんだ…！俺…すっごく嬉しいぜ
！」

「ありがとう…保君。えっと…吹雪は…？」

「…吹雪は、冬眠中だよ。美奈子ちゃん…起こしてやってくれよ…。
」

「へっ…？」

美奈子は怪訝そうに眉を潜めながらも、保の案内に従い地下室へ足を進める。

「吹雪…！？」

地下室のベッドで眠る吹雪を見て、美奈子は目を白黒させた。

体にコードを繋がれ、ただ息をするだけの植物人間状態。

「吹雪！聞こえてるんでしょ…？返事してよ！！」

大声で話しかけても、体を揺さぶっても全く反応は無い。

スウ…と穏やかな寝息が聞こえるだけだった。

「本当に…冬眠…してるみたい…。」

「うーん…美奈子ちゃんの声かけでもダメかー。お手上げだぜ…まったく。」

最後の希望も意味をなさなかったので、保はガツクリと肩を落とし頭を抱える。

美奈子は、吹雪を見下ろして立ちすくしていた。

（一週間前…私が表の世界に戻った日…。あの日、吹雪は…。私の…せいなんだ…。）

「ちよいと…お二人さん。若いのに、なーにしけた顔してるのかい？」

「ドクター古葉…。」

保に名を呼ばれた古葉は、更に奥にある部屋から歩いてきた。

「…ああ、吹雪のことが心配で何にも手が付かないってわけかい。」

「吹雪がこんな状態になったのは…私のせいだから。元気なんて出るわけもないですよ…。」

「水野美奈子ちゃん…だったっけ。こんな話、知ってるかい？」

古葉の唐突な質問に、美奈子は不思議そうに彼女を見つめ返した。

保も、なんだ…と顔を上げて古葉に視線を移す。

「悪い魔女に眠らされた姫は、王子様の口付けによって目を覚ましました。めでたし、めでたし。」

「…はい？」

「ってことはさ、こんな話も有り得るんじゃないか？契約者に襲われて眠りについてしまった王子は、異世界の姫の口付けによって目を覚ましました。めでたし、めでたし…とか。」

「あの…意味がわかりませんけど。」

美奈子はやや呆れ顔で突っ込みを入れた。

「同じく…意味わかんねえし。ドクター古葉…あんだ、どういっ…」

「別に意味を理解しなくてもいいさ。…いい物あげるよ、美奈子ちゃん。」

古葉はツカツカと美奈子に歩み寄ると、彼女の手白い錠剤を一つ載せた。

「これは…？」

「吹雪を目覚めさせる秘薬。…昨日、完成した試薬だけだね。必ず効くという保障はできないけど…使ってみて。」

保と美奈子にヒラヒラ手を振って、古葉は颯爽と奥の部屋へと戻って行った。

「…怪しさ百パーセントだな。」

「だよな…って、ナイト！？帰って来てたのかよ…！」

保の背後で発言したのは、騎士だった。

ちよつと前にね、と答えを返しながら、彼女は長イスに腰掛けた。

「話は聞かせてもらった。美奈子…、その薬を使うのか？」

「……………うん。私…古葉さんを信じてみる。吹雪とまた話ができるなら…おとぎ話みたいなことでも、試してみたいの。」

騎士に言葉を返すと、美奈子は錠剤を口にポイツと入れた。

そして、

「美奈子ちゃん…。」

「……………」

保と騎士の二人が見守る中、美奈子は吹雪にそつと口付けをした。

錠剤がコロンと転がり、吹雪の口の中に移る。

「吹雪…目を覚まして。」

美奈子は吹雪から離れると、両手を組んでそう願った。

……吹雪は目覚めなかった。

「…はあ。そんな都合いい話、あるわけねえよな…。」

保が諦めムードでそう言った時。

「……………美奈子…？」

眠り続けていた吹雪が、瞼を重たげに上げ呟いた。

「吹雪…！目が…覚めたの…？」

「ええっ！？まぢかよ…信じらんねえ…」

嬉しそうに微笑んで駆け寄る美奈子と、口をあんぐり開けている保。

「…奇跡、だな。」

騎士が小声で断言するように言った。

「俺は…眠っていたのか？」

吹雪は上半身を起こし、数度まばたきをした。

「そつだよ…吹雪！寝坊するにも、程があるんだから…」

「美奈子…おまえは、表の世界に帰ったはずじゃなかったのか…？」

「えっ…あ…わ、忘れ物したのを思い出して。また…帰ってきてちゃった。」

美奈子はどきまぎしながら、吹雪の問いかけに返答する。

「なかなかいい雰囲気だな。」

「俺達は、退散すつか！」

「た、保君！騎士ちゃん！別にそんなんじゃ…」

騎士と保は美奈子の弁解を聞かず、ササツと階段を上がっていく。

地下室には、美奈子と吹雪の二人だけが残された。

「何を言ってるんだか…あいつらは。」

吹雪は額に手を当て、フウと深いため息をつく。

「う、うん…そうだね。私と吹雪…仲良くないのにね。」

「……………美奈子。」

「な、何よ…吹雪?」

「…おかえり。」

「えっ…?」

美奈子は全く予期しなかった言葉をかけられ、狐につままれたような顔をした。

「俺がそんなこと言うと、変か?」

「…ううん、変じゃないよ。ただいま、吹雪。」

眉を潜めて不機嫌そうに訊く吹雪に、美奈子はいっこり笑顔で返したのだった。

荒れ果てた大地、ホームから十キロほど離れた場所。

「伊穂華…そなたのことは、我が必ず自由にしてやる。待っていてくれ…。」

地面を見下ろして、眩く忒穂華の姿があった。

そうして、一分も経たない内に、忒穂華はまた歩き始めた。

リン…と鈴の音が響き、それは風に流されすぐに聞こえなくなったのだった…。

二人の予言者ゝ了ゝ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5547f/>

神風伝記

2010年10月10日05時38分発行